

こ もぐら
小葦遺跡

—福岡市西区大原B遺跡第1次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第541集

1997

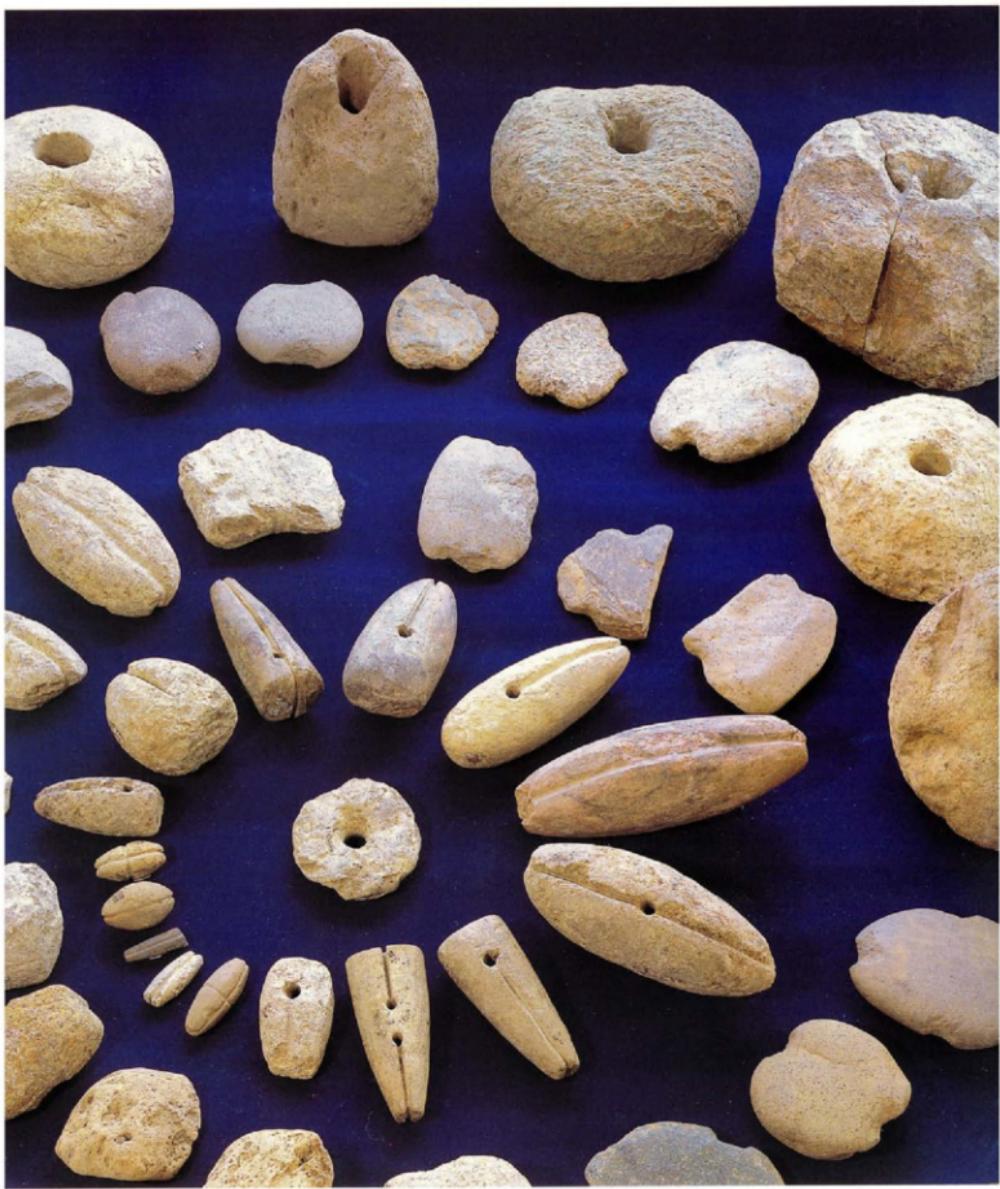
今津大原小葦遺跡調査会
福岡市教育委員会

小葦遺跡

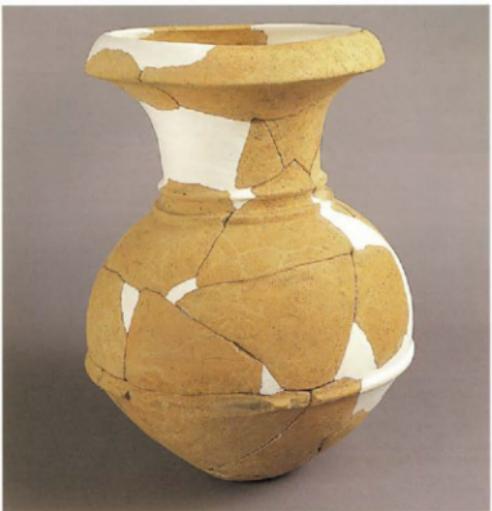
一大原B遺跡第1次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第541集



平成9年
今津大原小葦遺跡調査会
福岡市教育委員会



小莊遺跡出土の石錘



動物絵画の壺

序

福岡市は古来より大陸文化摂取の門戸として栄え、市内には数多くの遺跡や文化財が残されています。

福岡市西郊の今津は、中世には日宋貿易の基地として、近世には全国を駆け巡った五ヶ浦廻船の基地として栄えました。また今津周辺の最近の各種開発に伴う発掘調査では、縄文時代創草期から始まる各時期の縄文時代遺跡、弥生～古墳時代、さらには奈良～平安時代の遺跡も知られるようになります。各時代の歴史が明らかになりつつあります。

本書は、病院建設に伴い、1977年2月から4月に実施した福岡市西区今津大原に所在する小萍遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査では、弥生時代の大型竪穴住居跡を検出すると共に、土器や石器をはじめとする膨大な量の遺物が出土しました。本書が文化財保護の一助となり、学術研究の資料としても活用されますことを願っています。

1997年3月1日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊



遺跡遠景

例　言

1. 本書は、福岡市西区大原にあるシーサイド病院の建設工事に先立って昭和52年(1977)2月1日から昭和52年4月7日まで実施した発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は、「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表－西郷地域－」(1969年刊)に小坪(こもぐら)遺跡と登載されていたことから、発掘以来この遺跡名を用い、本書名も「小坪遺跡」とした。その後、遺跡分布調査や周辺遺跡の発掘調査が行われ、平成7年発行の『福岡市埋蔵文化財分布地図』では、周辺遺跡と合わせて大原B遺跡と改称された。小坪遺跡はその「次調査に当たることから、「大原B遺跡第1次発掘調査」の副題をつけた。
3. 本書に掲載した地形測量図、構造実測図は磁北を用いている。
遺物の実測図と写真は、次のように縮尺を統一し、それぞれ通し番号をつけている。

弥生土器=1/4 石器=1/2 玉類=1/1

なお、発掘現場での取り上げ番号と福岡市埋蔵文化財センターでの登録番号とは異なるので、その対照表を作成している。

4. 本書は塙屋勝利と力武卓治が協議、分担して作成、編集した。なお巻頭写真のうち動物絵画の表は、九州歴史資料館の石丸洋氏の撮影である。石鐘実測図の一部は、永洲昭子さんの原図に加筆して掲載している。また石鐘の多くは福岡市博物館に展示中であったので、撮影、実測などにご協力をありがとうございました。
5. 発掘調査によって出土した遺物、および実測図や写真などの記録類は、整理作業を済ませて福岡市埋蔵文化財センター(TEL092-571-2921)に収蔵、保管しているので、図面、遺物の登録番号で検索、活用できるようになっている。

遺跡調査番号	7-6-1-6	遺跡略号	OHB-1
調査地地番	福岡市西区今津大原字小坪		
開発面積	5,016畝	分布地図番号	大原128
調査面積	400畝	調査担当者	塙屋・力武
調査期間	昭和52年(1977)2月1日～4月7日		

本文目次

第1章　はじめに	1
1. 小篠遺跡の発見	1
2. 小篠遺跡の位置と歴史的環境	2
第2章　発掘調査にいたるまで	7
1. 試掘調査	7
2. 事前協議	8
3. 調査の組織	8
第3章　発掘調査の記録	10
1. 発掘調査の概要	10
2. 遺構と遺物	17
1. I面の調査	17
2. II面の調査	20
3. 竪穴住居跡の調査	23
4. 畳穴住居跡の遺物	25
5. I、II面の遺物	27
土器 瓦	27
甕	33
高杯	42
鉢	45
器台	49
土器番号対照表	51
石器 石鏃	53
石劍	62
石斧	62
砥石	63
筋鍤車	64
刃器	65
石鎌	65
玉類	65
軽石	66
石製品計測表	66
第4章　おわりに	69
遺構について	69
遺物について	69
むすび	70
参考・引用文献	71
あとがき	72

挿図目次（図、写真）

1	削平された小蘿遺跡（昭和51年）	1
2	周辺の遺跡と文化財	2
3	遺跡遠景	3
4	元寇防塁（遠方の山が椎子岳山）	3
5	蒙古襲来絵図	3
6	孟蘭盆一品経縁起（国宝 菩薩寺）	3
7	「韓亭」万葉歌碑	4
8	古墳時代の住居跡（大原C遺跡）	4
9	桑原遺跡（桑原飛櫓貝塚）	4
10	桑原遺跡の動物骨	4
11	周辺の発掘遺跡	5
12	今山遺跡の石斧	6
13	試掘調査風景（正面の山は呑山、左は異沙門山）	7
14	試掘調査の出土遺物（縮尺1/4）	7
15	試掘トレンチと発掘区（縮尺1/600）	9
16	発掘開始	10
17	始業時の打合せ	10
18	1号トレンチの土層（縮尺1/40）	10
19	発掘区とグリッド図（縮尺1/100）	11
20	土層の観察	12
21	I面の検出作業	12
22	2号トレンチの土層（縮尺1/40）	12
23	最下層から出土した石錘	13
24	実測と取り上げ作業	13
25	発掘作業員と学生のみなさん	14
26	出土状況を記録する	14
27	吹雪の中の発掘作業	14
28	II面を撮る	15
29	姿を現した竪穴住居跡	15
30	住居跡の標高を測る	15
31	I面の遺物出土状況（縮尺1/100）	17
32	I面全景（南から）	18
33	I面全景（東から）	18
34	I面実測図（付図）（縮尺1/50）	
35	I面全景（北から）	19
36	I区I面の遺物出土状況	19
37	II面の検出作業	20

38	Ⅱ面の遺物出土状況（縮尺1/100）	20
39	実測と遺物の取り上げ	21
40	Ⅱ面の遺物	21
41	土器、石製品	22
42	石錘	22
43	動物骨と石錘	22
44	Ⅱ面実測図（付図）（縮尺1/50）	
45	Ⅲ面の遺物と竪穴住居跡（縮尺1/100）	23
46	竪穴住居跡（南から）	24
47	竪穴住居跡（東から）	24
48	竪穴住居跡実測図（付図）（縮尺1/50）	
49	壁溝出土の壺	25
50	床面出土の壺と石錘	25
51	床面出土の壺	25
52	石器（縮尺1/2）	26
53	壺 壺（縮尺1/4）	26
54	I、Ⅱ面の遺物 壺Ⅰ類（縮尺1/4）	27
55	壺Ⅰ類	28
56	壺Ⅰ類（縮尺1/4）	28
57	壺Ⅱ類（縮尺1/4）	29
58	壺	30
59	壺（縮尺1/4）	31
60	弥生時代の絵画	32
61	壺Ⅲ類（縮尺1/4）	32
62	壺	33
63	甕Ⅰ類（縮尺1/4）	33
64	甕Ⅱa類（縮尺1/4）	34
65	甕Ⅱa類	34
66	甕Ⅱa類（縮尺1/4）	35
67	甕	35
68	甕Ⅱb類（縮尺1/4）	36
69	甕Ⅱb類（縮尺1/4）	37
70	甕Ⅱb類（縮尺1/4）	38
71	甕	39
72	甕	39
73	甕	40
74	甕Ⅲ類（縮尺1/4）	41
75	甕	41
76	甕Ⅳ類	41
77	甕Ⅳ類（縮尺1/4）	41

78	高坏（縮尺1/4）	42
79	高坏	43
80	高坏（縮尺1/4）	44
81	鉢Ⅰ類（縮尺1/4）	45
82	鉢	45
83	鉢Ⅱ類（縮尺1/4）	46
84	鉢Ⅲ類（縮尺1/4）	47
85	鉢	48
86	器台Ⅰ・Ⅲ類（縮尺1/4）	49
87	器台Ⅱ・Ⅳ類（縮尺1/4）	50
88	石錘分類図	53
89	石錘I b・I c・I類（縮尺1/2）	54
90	石錘	54
91	石錘Ⅱ類（縮尺1/2）	55
92	石錘	55
93	石錘Ⅳ類（縮尺1/2）	55
94	石錘	55
95	石錘Ⅴ類（縮尺1/2）	56
96	石錘	56
97	石錘Ⅵ類（縮尺1/2）	57
98	石錘	57
99	石錘（縮尺1/2）	58
100	石錘	58
101	石錘Ⅶa類（縮尺1/2）	59
102	石錘	59
103	石錘Ⅶb類（縮尺1/2）	60
104	石錘	60
105	石錘（縮尺1/2）	61
106	石錘	61
107	石錘Ⅷc類 未製品（縮尺1/2）	62
108	石錘未製品	62
109	石斧（縮尺1/2）	63
110	石斧	63
111	砥石（縮尺1/2）	63
112	紡錘車（縮尺1/2）	64
113	紡錘車	64
114	双器 石鎌 玉類（縮尺1/2 1/1）	65
115	刃器 石鎌	65
116	輕石（縮尺1/2）	66

第1章 はじめに

1. 小篠遺跡の発見

昭和51(1976)年、医療法人恵愛会は、福岡市西区今津大原字小篠にシーサイド病院の建設を計画した。当時の福岡市教育委員会では、民間開発に対する埋蔵文化財の有無のチェック体制は、早良区の有田・小田部周辺および四箇周辺（当時は西区）、博多区の板付周辺の3地区を除いては、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発に対してのみ事前審査を行っており、1,000m²未満の開発や農地転用、都市計画法で届を免除されている病院や駅舎などの建設に対しては事前審査を行っていないかった。シーサイド病院建設予定地は、1968年に福岡市教育委員会が実施した分布調査で弥生土器や石器などの散布が認められ、『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表—西部地域一』(1969年刊)に「小篠遺跡」として登載されていた。また、1975年12月に刊行された『今津小学校創立百周年記念誌今津』には、福岡市教育委員会文化課の柳田純孝氏によって小篠遺跡から採集された弥生時代中期から後期の土器や石斧などが紹介されていた。しかしながら当時の埋蔵文化財事前審査体制の不備により、事前審査が行われないまま建設工事が始まったのである。

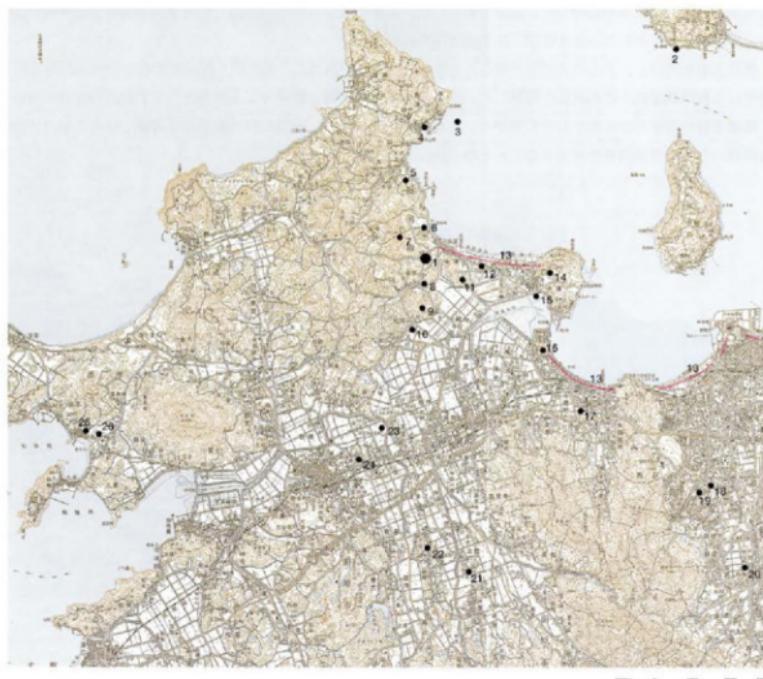
建設工事が進捗し、表土の大部分が削られて弥生土器などが散乱し、基礎杭も打ち込まれていた1976年8月、偶然にも柳田純孝氏がこの状況を発見した。早速病院側に工事の中断を申し入れると共に、遺跡の保存について協議を行うこととなった。しかしながら、それまでの経緯から、遺跡の現状保存は不可能ということで、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。



1 削平された小篠遺跡 (昭和51年)

2. 小蓑遺跡の位置と歴史的環境

小蓑遺跡は、福岡市西区今津大原字小蓑（こもぐら）に所在し、福岡市の西郊昆沙門山麓から柑子岳麓まで約3kmにわたってのびる海岸砂洲の長浜海岸西端に面する丘陵先端部に位置する。この地域は、博多湾の西側を限って北方に突出する糸島半島の東南基部に当たり、本遺跡は標高254.5mの柑子岳山頂から東南にのびる丘陵先端部に立地する。糸島半島は北端部と東側部分が福岡市に属し、西側は糸島郡志摩町に属しており、福岡市側の地形は、分水嶺を異にする小河川で開析された小規模な沖積地が3か所に見られ、最も北側の西浦は玄界灘に開け、中部の小田と南部の大原は博多湾側に開けている。本遺跡は、長浜海岸の汀線から西南方へ約500m入った花崗岩風化土を基盤とする洪積丘陵上にあり、南側は幅約100mの谷水田を挟んで桑原の丘陵に面している。桑原丘陵の東側には独立丘陵の呑山が対面し、その間を大原川が北流して長浜海岸に注いでいる。大原川中流から上流にかけての右岸は元岡の丘陵地帯で、かつては糸島水道の深い入江が湾入していたと考えられるが、江戸時代初期以降の干拓で丘陵際まで水田化されている。



2. 周辺の遺跡と文化財

- | | | | | | |
|----------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 小蓑遺跡 | 2. 金印出土堆定地 | 3. 唐泊（広形銅矛） | 4. 三所神社（給馬） | 5. 小田支石墓 | 6. 大原D遺跡 |
| 7. 柚子岳城 | 8. 桑原遺跡 | 9. 石ヶ原古墳 | 10. 瓜屋貝塚 | 11. 呑山遺跡 | 12. 長浜貝塚 |
| 13. 元寇防壁 | 14. 舊願寺 | 15. 今津貝塚 | 16. 今山遺跡 | 17. 今宿五郎江濱跡 | 18. 野方久保遺跡 |
| 19. 野方遺跡 | 20. 吉武遺跡 | 21. 三雲遺跡 | 22. 平原遺跡 | 23. 志登支石墓 | 24. 浦志遺跡 |
| 25. 新町遺跡 | 26. 御床松原遺跡 | | | | |

今津大原の地は、昭和17（1942）年4月に福岡市に合併する以前は糸島郡今津村に属し、江戸時代には筑前国（福岡藩）の志摩郡今津村の枝村大原村であった。江戸時代初期から明治初期にかけて、この地域の唐泊・宮浦・今津・浜崎と、博多湾内の残島（能古島）の五つの浦は、福岡藩の藩米や特産物を輸送する海運業の基地として栄え、五ヶ浦巡船は全国の海を駆け巡った。宮の浦の三所神社には亨和3（1803）年に宮浦の4人の船頭が奉納した板絵著色武者絵馬があるが、この絵馬は江戸の浮世絵師柳々居辰彌（葛飾北斎の高弟）内筆の豪華なもので、往時の繁栄ぶりが想われる。

南北朝から戦国時代のこの地域一帯は小武氏・大内氏・大友氏など守護・戦国大名たちの戦闘の舞台となつたが、これは平安時代末期に仁和寺領として成立した荘園「怡土莊」をめぐる争奪戦であり、小武氏の衰退以後は、本道跡のすぐ北に聳える柑子岳城による大友氏と、前原市にある高祖城を拠点とする大内氏（原田氏）との間で激しい攻防戦が展開された。

文永11（1274）年、元軍は博多湾から攻め寄せ、日本軍との間で激しい戦闘が行われた（文永の役）。これを契機に建治2（1276）年、博多湾沿岸に九州九ヶ国の御家人の分担で石塁地（元寇防壁）が築かれたが、毘沙門山麓から柑子岳麓までの長浜海岸には、日向国と大隅国との分担で延々3kmにわたって石塁が築かれている。またこの毘沙門山西南麓の今津は「怡土莊」の外港の位置を占め、仁平元年（1151）年の博多・箱崎の大追捕を契機に、博多や箱崎に代わって日宋貿易の基地として栄えた。今津周辺一帯からこのことを示す多量の宋代の陶磁器類が採集されている。今津には大覚禪師（蘭溪道隆）を開基に、鎌倉幕府第5代執権北条時頼を壇越として建長元（1249）年に創建された勝福寺、入宋僧榮西を開基として安元元（1175）年に創建された誓願寺がある。勝福寺には国指定重要文化財の「絹本着色大覚禪師像」、誓願寺には国宝の榮西自筆「孟蘭盆一品経縁起」、国指定重要文化財の「鉢弘寂八万四千塔」、「孔雀文沈金経箱」などをはじめとする多くの文化財が残されている。

榮西は治承2（1178）年7月15日に「孟蘭盆一品経縁起」を著したが、この中に「嶋縣」の名がみえ、当時の今津は嶋縣に属していたことが知られる。嶋は志



3 遺跡遠景



4 元寇防壁（遠方の山が柑子岳山）



5 蒙古襲来絵詞



6 孟蘭盆一品経縁起（国宝 誓願寺）

麻に通じ、「倭名類聚抄」巻九にみえる志麻郡である。志麻郡には韓良、久米、登志、明敷、鶴永、川邊、志麻の七郷があり、今津に登志神社があることなどから、この周辺は登志郷に属していたと考えられる。『万葉集』巻第十五には、天平8(736)年の遣新羅使の歌を載せているが、筑紫館(後の湧脛館)で七夕を過ごした一行は荒津の浜を船出して韓亭に到っている。韓亭では六首の歌が詠まれ、その題に「筑前國の志麻郡の韓亭に到りて船泊て三日を経たり(後略)」とある。韓亭は糸島半島北半博多湾側の現在の唐泊漁港のことであり、当時は志麻郡の韓良郷に属していたと考えられ、海外渡航の寄港地であった。

以上が文献等で知られる小蓙遺跡周辺の主な歴史概要であるが、次に小蓙遺跡周辺の遺跡の分布や発掘調査状況を概観する。この周辺では旧石器時代の遺跡は知られていないが、小蓙遺跡の北方約500mを隔てた丘陵上にある大原D遺跡の第4次調査(1995年)では、縄文時代創草期の住居跡が3棟以上検出され、押型文土器、石鎌、スクレーバーなどが出土している。大原D遺跡では、それ以前の3次にわたる調査で、縄文時代早期の石鎌、石槍、中期の阿高式土器、晚期の黒川式土器などが出土しており、縄文時代各時期にわたり断続的に小規模な集落が営まれていたと考えられる。本遺跡から谷水田を挟んで東南の丘陵上にある大原C遺跡でも縄文時代の土器や石器が調査されている。またこの一帯は福岡市内で唯一貝塚が集中する地域である。本遺跡東南の長浜海岸には縄文時代晩期~弥生時代前期の長浜貝塚があり、南側の桑原では縄文時代中期から後期の桑原飛櫛貝塚が発掘調査されており、人骨8体や貝輪などが出土している。そのさらに南側の元岡では、縄文時代後期を主体とする元岡瓜尾貝塚が知られ、県の史跡に指定されている。これらの貝塚の貝類組成を見ると、いずれも内湾性の貝類で占められ、縄文時代後期から弥生時代前期初頭の時期には、今津湾は長浜海岸内側と丘陵谷部まで深く湧入していたと考えられる。

弥生時代の貝塚遺跡では、前述の長浜貝塚のほかに、大正5(1916)年に中山平次郎氏が『考古学雑誌』に報告した弥生時代前期の今津貝塚が知られている。また、石斧製作遺跡として小蓙遺跡のすぐ東側の独立丘



7 「韓亭」万葉歌碑



8 古墳時代の住居跡 (大原C遺跡)



9 桑原遺跡 (桑原飛櫛貝塚)



10 桑原遺跡の動物骨



11 周辺の発掘遺跡

陵上に呑山遺跡があり、今宿松原先端の丘陵には今山遺跡が知られている。いずれも玄武岩製の石斧未製品が出土し、専門的な石斧製作が開始されるのは前期末に遡ると考えられている。弥生時代前期の埋葬遺跡では、小篠遺跡の北方約2kmの小田の海岸部に腰鉢を内部主体とする支石墓の小田砂丘遺跡がある。大原地区では、大原A遺跡で中期の竪穴住居跡1棟が出土したほか、弥生時代の土壙・ピット・包含層が検出されている。この地域の弥生時代の遺跡は慣海的性格を有し、可耕地がほとんど認められないことから、大規模な集落は形成されなかったと思われる。

古墳時代の遺跡では、大原地区には1~2基の小円墳を単位とするA~Gまでの7つの支群で構成される大原古墳群があり、東南に位置する呑山丘陵上にも古墳が在った。また最近の九州大学移転地の調査では、本遺跡の南側に位置する山手から元岡の丘陵上に6基の前方後円墳と72基の円墳が確認され、発掘調査が継続中である。さらに毘沙門山から今津にかけての丘陵には、23基の円墳からなる今津古墳群があり、A~Hまでの8つの支群に分類されている。古墳時代の集落遺跡の調査例は少なく、1993年に調査された本遺跡の南側に面する大原C遺跡で、5世紀代の竪穴住居跡1棟が検出されたにすぎない。

古代から中世の遺跡では、本遺跡に近接する大原遺跡群が特徴的である。大原A遺跡では、8~9世紀代の製鐵炉3基・鍛冶炉1基・掘立柱建物跡・中世の掘立柱建物跡・土壙が検出された。大原C遺跡では、中世の溝6条・掘立柱建物跡4棟・井戸1基が検出され、輸入陶磁器・黒色土器・瓦器・土師皿などの遺物が出土している。大原D遺跡では、奈良~平安時代の掘立柱建物跡や製鐵炉が検出され、当該期の土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器・瓦・炉壁・鐵滓などが出土している。大原A遺跡とD遺跡の間に大原E遺跡では、奈良から平安時代の焼土壙・鍛冶炉・柵列・土壙・溝などの遺構が検出され、土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器・鐵滓などが出土している。このように、古代における大原周辺では製鉄が盛んに行われたことがうかがえるが、その理由は、大原海岸は浜砂鉄が豊富に存在し、後背地として燃料を供給する山地があったことが考えられる。製鐵関連遺跡は、九州大学移転地の分布調査でも相当数の鉄滓分布が確認されており、今後の発掘調査でこの一帯の製鉄の実像が解明されることが期待される。

長浜海岸に延長3kmにわたって築かれた今津元寇防壁は、大正2(1913)年に2か所が発掘され、昭和43(1968)年に福岡市教育委員会の委託で九州大学考古学研究室が本格的な調査を行った。その結果、石壁は海側の砂丘傾斜面に高さ3m、上幅2m、下幅3mの台形状に石を積み、内部の隙間に砂を充填した構造であることが分かった。使用された石材は、西側が柑子岳産の花崗岩、東側が毘沙門山産の玄武岩が多く、中央部は玄武岩と花崗岩が交互に連続している。今津地区を分担した日向国と大隅国の工法の違いや、国内御家人の所領の広さに応じて築いた工事区間の長さを反映したものと考えられる。本遺跡のすぐ北に築かれた柑子岳山頂にある柑子岳城については先述したが、このほかに、周辺の室町時代から戦国時代の山城跡は、九州大学移転地内に大友氏の水崎城跡と草場城跡があり、今津にも白杵氏城跡が築かれている。いずれもこれまで発掘調査が行われておらず、今後の調査が待たれる。



12 今山遺跡の石斧

第2章 発掘調査にいたるまで

1. 試掘調査

工事中止後の1976年11月、遺跡の内容を把握するために、建設業者の全面的な協力を得て試掘調査を実施した。

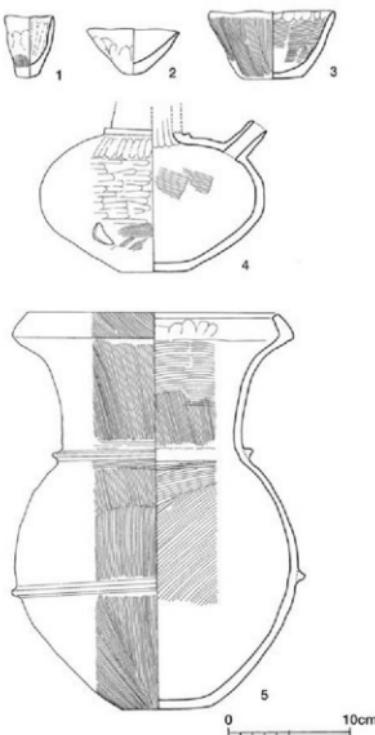
対象地は畠として耕作されていたが、造成工事によって上下2段の階段状に削平されており、切土が浅くもっとも遺構が残っていると思われる下段に4本のトレンチを設けた。設置場所は、本館と看護婦寮の建設地に当たるが、どのトレンチでも弥生時代後期から古墳時代の土器が数点出土するものの、造成整地直下にすぐ地山面が現れ、遺物包含層も遺構も検出することが出来なかった。

4階建て病棟が建設計画されている上段部には遺跡発見の端緒となった土器片が散乱しているが、その異常なほど多さは遺構の存在を強く期待させるとともに、逆に造成工事によってすでに壊滅していることを示す光景とも思われた。また土器の散乱している部分以外は、地山の黄褐色土が露出していることも、削平が遺物包含層を突破し、地山面まで達していると予想され、遺構存在の否定的な材料であった。このために散乱している土器層の厚さや広がりを確認することを目的として上段の造成地形に合わせて、長軸（南北）30m、短軸（東西）18mの十文字トレンチを設定した。

この結果、地表に散乱しているように見えた土器片は、なんと直径12m、深さ約70cmの凹地に堆積している包含層の上部であることがわかった。この凹地以外には特別な遺構はなく、まさに土器塚、あるいは土器溜めと呼ぶに相応しいほどの堆積状況であった。しかも図14のように完形の壺や手捏ね土器、さらに注口土器なども含まれ、単純に廃棄場所とは考えにくいことから、これまでに類例のないきわめて特異な遺跡である可能性が強く、発掘体制を整えた慎重な本格的調査が必要となつた。



13 試掘調査風景（正面は香山、左は毘沙門山）



14 試掘調査の出土遺物（縮尺1/4）

2. 事前協議

試掘調査の結果、病院建設地面積 5,096m²の内、最も遺物が集中する北側の旧畠地中央部分の20m×20mの400m²を本調査の対象とすることになった。その後、発掘調査期間、調査体制、資料整理、調査費用について病院側と数次にわたる協議を行い、調査体制は文化課内に今津大原小篠遺跡調査会を設置し、資料整理を含む調査費用は恵愛会が負担して調査会に委託することとなった。年を越した翌昭和52(1977)年1月22日に、両者の間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約が締結され、発掘調査期間は2月1日から2月20日までとされた。

実際に現場の調査を開始したのは2月7日からであるが、調査の過程で天候不順による実質作業日数の減少、当初予想された遺物包含層は弥生時代後期だけでなく、さらに下部に弥生時代中期の包含層と遺構の存在が確認されるにおよび、2月20日に4月9日までの調査期間の延長、調査費の増額を内容とする委託変更契約を締結した。

このように、遺跡の発見から試掘調査、本調査に到る過程や本調査の完了まで、病院側には多大のご迷惑をおかけしたが、文化財保護に対するご理解とご協力のおかげで、4月7日に無事発掘調査は終了した。本調査の組織は次のとおりである。

3. 調査の組織

調査委託：医療法人恵愛会 代表者 川添 勇

調査主体：今津大原小篠遺跡調査会

会長 清水 義彦（福岡市教育委員会文化課長）

庶務担当 三宅 安吉（文化課埋蔵文化財係長）

古藤 国生（文化課埋蔵文化財係）

庶務補助 塚田千恵子（文化課埋蔵文化財係）

調査担当 堀屋 勝利・力武卓治（文化課埋蔵文化財係）

調査補助 百武 謙治

実測補助 長沼 孝・佐藤 正知・富田 和夫（静岡大学）

安部 克子・津川 直子・江藤 潤子・高山久美子・増喜 緑子

中島 基子・菊川ひづる・西村 真一・真戸かよ子・小川かよ子

(熊本大学)

発掘作業 横尾 善助・石田忠次郎・石田竹次郎・百武勝博・池 安彦・石田利秀

高城とも子・松浦ハツネ・塙本フジエ・松浦 鈴子・井島えみ子

鷹川えみ子・三苦 道子・中村 夏子・林 鈴子・洞 カナ

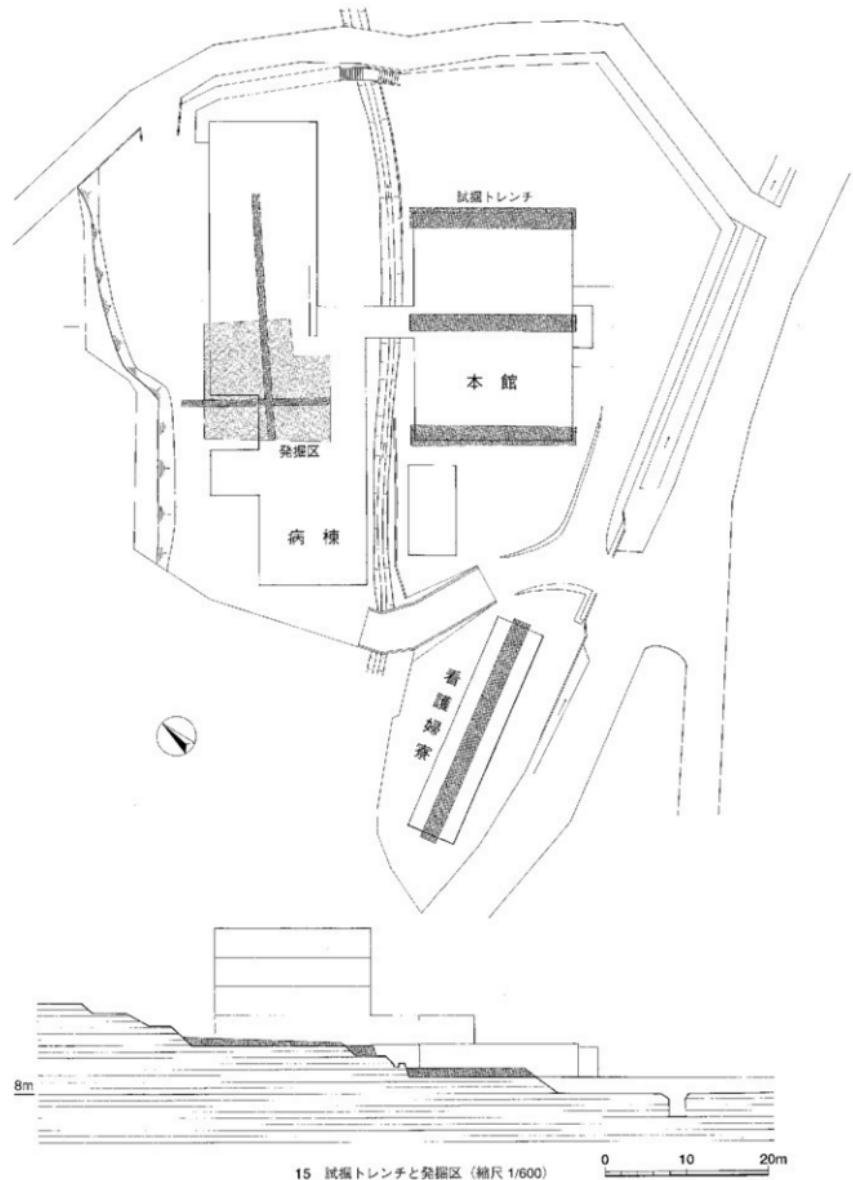
橋崎みつ子・野間 由美

現場庶務 石田 栄子

資料整理 花畑 照子・花田 早苗・山中香穂里・井元 雅枝・池田 山美

永淵 昭子・桑野 正子・森田 真実・都地 和子

発掘作業から資料整理、そして報告書作成までには、この他にも多くの方々からご協力をいただいた。



15 試掘トレンチと発掘区（縮尺 1/600）

第3章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

発掘調査は旅寒期の2月7日に着手した。地元大原地区から集まった作業員に試掘の結果やこれからの調査計画を説明し、さらに発掘機材の点検や安全講習をした後、さっそく発掘作業に取りかかった。まず試掘調査で設定した十文字トレーニチ内の堆積土や試掘時の堆土をベルトコンベアーを用いて除去し、トレーニチ断面の土層観察を再度行うこととした。本来この地点は急斜面を呈する丘陵先端部で、開発以前は段々畑が営まれていた。試掘時には南北トレーニチを1号トレーニチ、東西トレーニチを2号トレーニチと呼んで遺物を取り上げたが、再度清掃をしたことによって次のようなことが分かった。

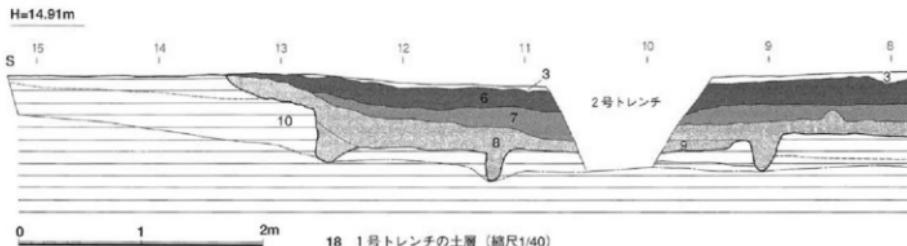
1号トレーニチの土層(図18)では、地山とした黄茶色土は南北両端で露出しているが、トレーニチ交点から南へ3.5m、北へ7.5mの間で深さ70cmの凹地になっており、ここに数層の遺物包含層がレンズ状に堆積している。最上層の茶褐色土は造成時の整地によるものであろう。整地層の3層を取り除くと多量の土器が姿を見せた。この粘質黒色土の6層は最大厚は25cmを測る。まさに土器だけがびっし

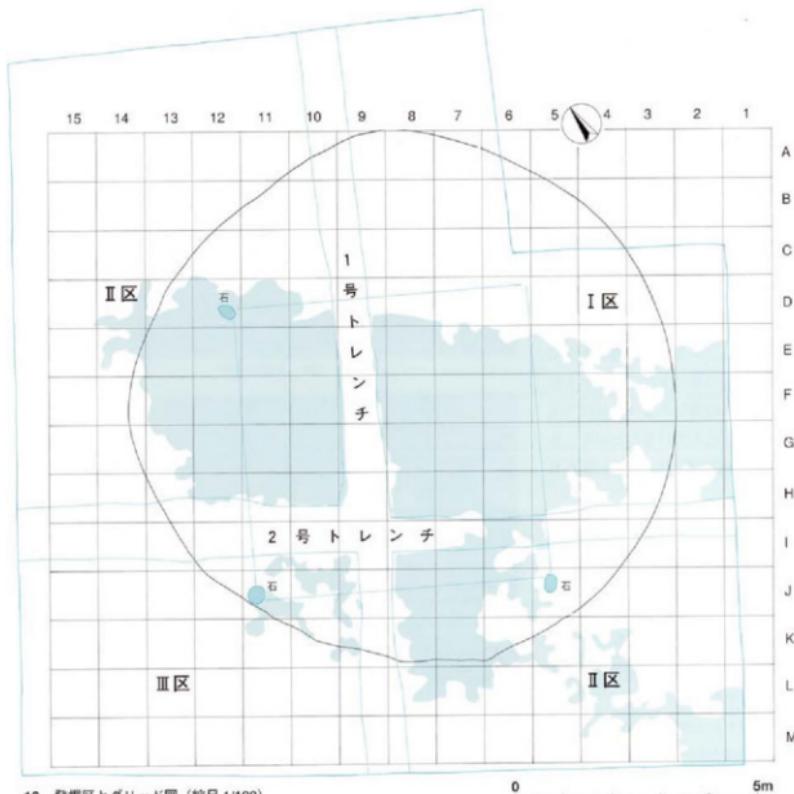


16 発掘開始



17 始業時の打合せ



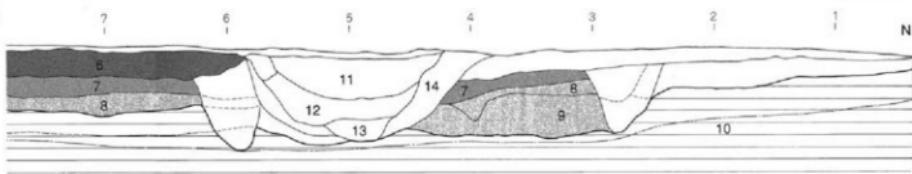


19 発掘区とグリッド図 (縮尺 1/100)

土層名

- | | | | |
|----------|----------------|----------|----------|
| 1.灰茶褐色土 | 1~3.層は造成による堅地層 | 8.茶褐色土 | Ⅲ層 住居の覆土 |
| 2.淡灰褐色土 | 堅く締まる | 9.黄茶褐色土 | |
| 3.赤褐色土 | わずかに土器片がある | 10.黄茶褐色土 | 地山 |
| 4.強茶褐色土 | 砂質 土器は鉢片 | 11.灰茶褐色土 | 砂質 木根入る |
| 5.黒茶褐色土 | 粘質 狹い路路跡台形 | 12.茶褐色土 | |
| 6.褐黃茶褐色土 | 遺物取り上げ面 | 13.茶褐色土 | |
| 7.濃茶褐色土 | Ⅱ层 | 14.茶色土 | 木根なし |

H=14.91m



り堆積しているかのような状況である。次の7層は濃茶褐色を呈し、6層にくらべ粘着力が弱く、土器は少なくなる。8層は茶褐色土で、土器の包含は上層にくらべ極端に少なくなる。粘着力がわずかに残り、乾燥すると底のクラックが入る。またトレンチ交点から北に5mの位置で6~8層を切って幅2mの半月状の断面があり、さらに北に1mに7、8層に掘り込まれた幅70cmの溝状の落ち込みが認められた。この2か所の溝状断面では、土器の量は少なく、しかも烟開墾時に投棄したような状況で木根が入り込んでいることから、かなり時期の新しい遺構と思われた。

2号トレンチの地山は、トレンチ交点より西4mで深さ30cmに落ち、東の下段側に向かって緩やかに傾斜している。この上の各層も同じように傾斜しているが、その堆積状況から大きく2時期に分けすることが出来る。

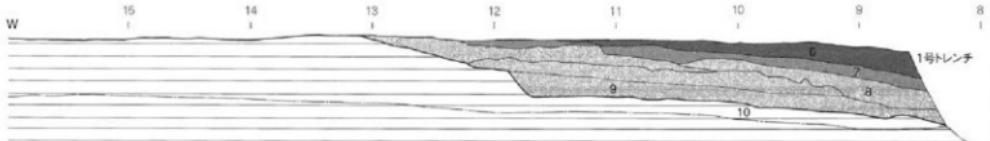
1号トレンチで6層とした土器包含層はトレンチの交点より西側



20 土層の検察



21 I面の検出作業



22 2号トレンチの土層 (縮尺1/40)

土層名

1. 茶褐色土	1~3 層は造成による 堅硬層	6. 粘質茶褐色土 遺物取り上げ1面
2. 淡茶褐色土	堅く構造ある	7. 濃茶褐色土 2面
3. 茶褐色土	わずかに土斑片がある	8. 茶褐色土 3面 住居の壁土
4. 淡茶褐色土	砂質 土斑は細片	9. 黄茶褐色土
5. 黄茶褐色土	粘質 漢字標識	10. 黄茶褐色土 地山

では3.5mに渡って露出しているが、トレンチ交点より東側では上部に1～5層の茶褐色土系の土層が厚く乗っている。その堆積角度は、6層～8層の遺物包含層とは異なり、また下段側から順次堆積が進んだことを示している。1層は灰茶褐色土、2層は淡茶褐色土で両層とも境界は明瞭でない。造成整地土のために、重機で堅く踏みしめられている。3層は1号トレンチと同じ茶褐色土、4層は濃茶褐色土でやや砂質である。1～4層とも土器を含むが、いずれも細片である。5層は黒茶褐色土で、やや粘着力がある。弥生土器片だけでなく高台付きの須恵器など多様な遺物を含んでいることから、斜面に二次堆積したものと考えた。

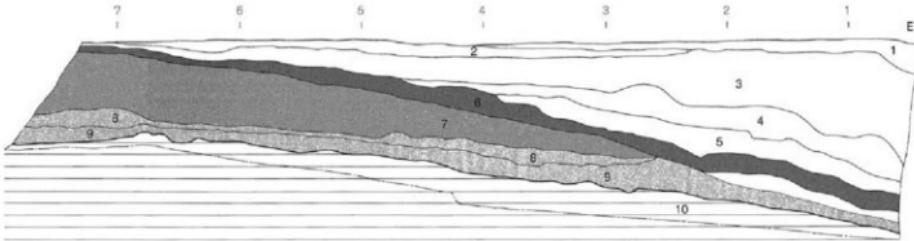
- 1、2号トレンチの土層観察をまとめると次のようになる。
1. 遺物包含層は、南北9m、東西12mの東西方向に長い横円形の凹地内にあり、全体が東側に傾いて堆積している。
2. 凹地は下部からほぼ水平に埋



23 最下層から出土した石鍬



24 実測と取り上げ作業



まり、最後にわずかに残った凹地に、西から東に向けて多量の土器が堆積した。

3. 凹地が土器によって完全に埋まりきった後、今度は斜面裾部から新たな堆積が始まり、現在の地形を形成した。
4. 地山のラインをたどると、自然作用で作られた凹地と言えない場所がある。特に1号トレンチの南端や2号トレンチの西端では、地山が垂直に近い壁となっており、また凹地下面も水平に近く、ここに直径20~30cmの柱穴状の落ち込みもあることなどから竪穴住居のような遺構が予想された。
5. 凹地の土器は、土層断面の土器を見るかぎり、弥生時代中期後半から弥生時代後期の時期である。
6. 土器の時期は、下層ほど古い傾向にあり、特に6層は後期の土器が大部分を占め、その堆積時間はあまり長くないと考えられる。

このような土層観察の結果、各層の遺物に時間的な経過が把握できる可能性があり、分層発掘しながら遺物の検出と実測、撮影等の記録作成を上層より繰り返すことにした。調査区は、造成地形やトレーニチの方向に合わせて設定し、その範囲は南北13m、東西15mの長方形である。また分層発掘を効果的に進め、かつ確実性を持たせるために図31のように調査区全周に造り方を組み、遺物取り上げの測量レベルを固定(14.91m)



25 発掘作業員と学生のみなさん



26 出土状況を記録する



27 吹雪中の発掘作業

した。造り方内は1m方眼のグリッドで仕切ることにし、北東隅から南にアルファベットを、西に数字を用い、その交点でグリッドを表示した。つまり北東隅はA-1グリッドであり、南西隅はM-15グリッドである。この調査区は、試掘トレンチで4区画されているので、北東から時計回りにI、II、III、IV区と呼び、遺物出土状況を10分の1で実測することにし、1枚の方眼紙で15グリッドをカバーする。その方眼紙割りつけは、やはり北東隅から南方向に実測図1、実測図2、、のように番号を順に付している。このような準備を整えて2月7日から6層の本格的調査にかかった。I、II区では、2号トレンチ土層で明らかなようない6層の遺物包含層の上に後世の土層が厚く被せており、東端では1.3mもの深さに達している。まずこれらの土層を剥ぎ取り、遺物の表面を出す作業をした。

6層の特徴は何といっても遺物の量が極めて多いということである。上から下までぎっしりと詰まっており、自然的な堆積ではなく人為的、かつ意識的に投棄されたものと考えられた。

試掘時にある程度の予想はしていたものの、日を追って遺物の分布範囲は広がり、まさに足の踏み場もない程の密集度となった。この多量の遺物を計画通り分層発掘するには、とても2人の担当者だけで処理できるものではない。幸い地下鉄建設に伴う発掘調査に参加していた静岡大学と熊本大学の考古学専攻学生に3日間だけ実測



28 Ⅲ面を掘る



29 姿を現した竪穴住居跡



30 住居跡の標高を測る

作業の応援をお願いした。写真25は大原地区の作業員の皆さんと学生たちである。手前側のⅡ区とⅢ区はすでに6層の遺物を取り上げた状況である。しかしながら、例年にない厳しい寒さで、何度も降雪によって調査を断念する日もあり、調査期間延長を余儀なくされることになった。

6層では平面実測を1回行った。遺物には通し番号をつけ、レベルを測定し取り上げた。土器のほとんどは、弥生時代後期中頃～後半のもので、大小の甕、壺、鉢、高壺、器台など豊富な器種を含み、石器には各種の石鎚、石斧、紡錘車などがある。特殊な遺物としては漁網の浮子として用いられたと思われる軽石も出土した。その遺物量は、迷路パンコンテナで60箱を超過し、用意していたコンテナでは間に合わず、ダンボールの蜜柑箱を急きょ購入して収納した。

次の7層は厚さが一定ではなく、G-6グリッド周辺では50cmと厚い。このため平面実測を2回繰り返したが、東に向かって傾斜していることから、斜面の上下端で果たして同一面として認識できるのか問題となった。6層にくらべ出土量が減少し、やや古い土器が増える。また接合可能な土器がまとまって出土することが多く、土器や石器に混じって動物や魚類と思われる骨片の出土が見られるのが特色である。

8層は先にも記したように、極端に遺物が少なくなる。6、7層が土器や石器の間に少量の土が混じるという状態であったのに対し、8層では堆積土に遺物が混じるという通常の遺跡の包含層である。土器は主に弥生時代中期後半で、6、7層とは明らかに時期が古い。

8・9層を完全に掘り下げ地山面を追うと、Ⅱ、Ⅲ区で幅40cmの溝が弧状に巡り、ついに直径11mの大型円形竪穴住居跡となった。1、2号トレンチの土層で竪穴住居跡の存在を予想しなかったわけではないが、これほど大型の竪穴住居跡になるとは想像もしなかったことである。その床面からは弥生時代中期後半の壺、甕や石剣、双器、石礫、石鍤などが出土した。

試掘調査の結果を踏まえて、発掘予算と期間を緻密に検討し算定したのであるが、予想以上の収穫があり、途中に期間の延長などの契約変更をして4月7日に完了した。

以上が調査概略であるが、本遺跡は弥生時代中期後半に大型円形竪穴住居が営まれ、廃絶後に遺物を包含しながら次第に埋まり、凹地が完全に姿を消す弥生時代後期中頃に異常なほどの多量の土器や石器が意識的に廃棄されたという経過をたどっている。福岡市とその周辺の同時期の竪穴住居跡が通常直径6m前後というのに比較して、あまりにも大きく、また意図的に場所を特定して廃棄したかのような遺物の出土状況は、その住人がきわめて特異な性格のもつものと考えられた。また、石鍤が多く出土することから、漁労活動に関連する行為の遺跡であろうと推測した。

年度の変わった昭和52年4月、間借りしていた建設業者のプレハブから、出土品、記録類などを整理事務所に搬入して整理作業に着手することにしたが、出土品の総量はダンボール箱で700箱に及ぶ膨大さであった。整理作業は遺物水洗い、注記、接合の工程を継続した。この接合復元作業で壺に動物が描かれているのが見つかり話題となった。しかし、何度も繰り返すが、遺物は單年度で整理出来るような量ではなく、報告書作成までには相当な日数が予想された。緊急調査の目的は、民間廟廟に支障のない発掘を行うだけではなく、開発工事によって永遠に消滅した遺跡の調査結果をいち早く公開し、誰もが利用、活用できるようにすることである。とりあえずその責任の一つを果たそうと4ページの『福岡市西区今津小坪遺跡速報』というパンフレットを作成、印刷し、関係者や地元の方々などに配付した。その後調査担当者の職場の異動などもあって、整理作業は長期間中断せざるを得なくなってしまった。今回ようやく報告書を刊行することになったが、発掘調査から20年間を経過したことは、調査担当者のまさに怠慢といるべきもので、関係者に対し、いや永遠に消滅してしまった小坪遺跡に対して深くお詫びをしなければいけない。

2. 遺構と遺物

1. I面の調査

遺物包含層と最下層の竪穴住居を試掘トレンチの土層実測図を踏襲して6～9層と記してきたが、これから6層をⅠ面、7層をⅡ面、8・9層をⅢ面と言い換える。Ⅲ面は竪穴住居跡床面上とその上部の埋め土をも含んでいる。

I面の遺物は、図31で分かるように南北8m、東西12mの中に密集している。北側縁は後世の溝状落ち込みでカットされているので、本来は長方形をしていただろう。図では斜面側に流れたように見えるが、全面に均一に出土しており、試掘トレンチで中心部を壊したのが惜しまれる。土器、石器に混じて拳大の自然円礫が多い。これらも漁網の重りとして利用された可能性が強いが無加工のために決めて手を欠く。土器は無造作に投棄され散乱したようにも見えるが、大きめの破片がE8～J6グリッドにかけて並んでおり、ほとんどが接合可能である。したがって自然に堆積したものではなく、また土器の破片を別地点から運んできて廃棄したものではないだろう。また推測の域を出ないが、遺物の間に80cm大の3個の丸い石が直角の関係で配置され、あたかも遺物投棄の範囲を指定しているような感じである。



31 I面の遺物出土状況（縮尺 1/100）





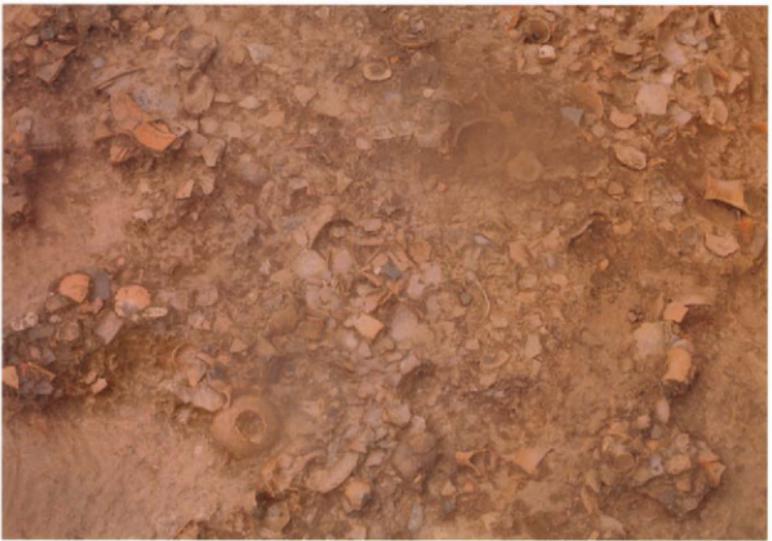
32 I面全景（南から）



33 I面全景（東から）



35 I面全景（北から）



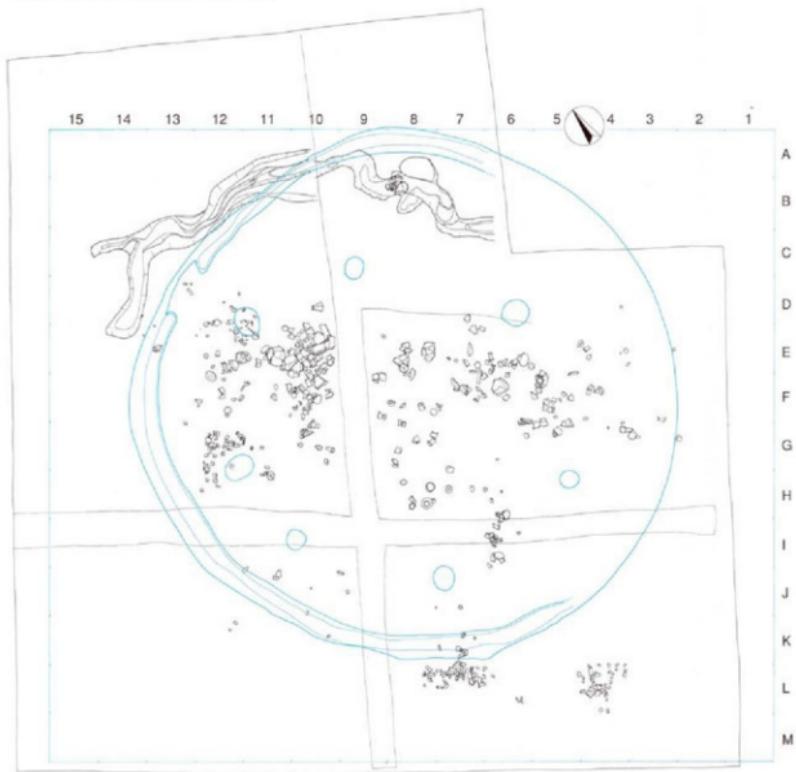
36 I区I面の遺物出土状況

2 II面の調査

II面は2回掘り下げ作業を行い、その都度平面図を実測作成したが、図38は上下2枚の図面を合成している。土器の出土量は確かに少なくなるが、I面と同じように調査区の全面に分布し、さらにまとまりがある。特に石鍤の出土点数が多くなる。なおC-12～B-9グリッドにかけて弧状にのびた溝は1号トレンチ土層でも観察できたもので、地山面までに達している。同じような落ち込みがB-7グリッドの7層下でも見られ、これらは不規則に蛇行し、壁の傾きも一定でないことなどから雨水等で自然に浸食された落ち込みと考えた。



37 II面の検出作業



38 II面の遺物出土状況（縮尺 1/100）

0 5m



39 実測と遺物の取り上げ



40 II面の遺物



41 土器、石製品



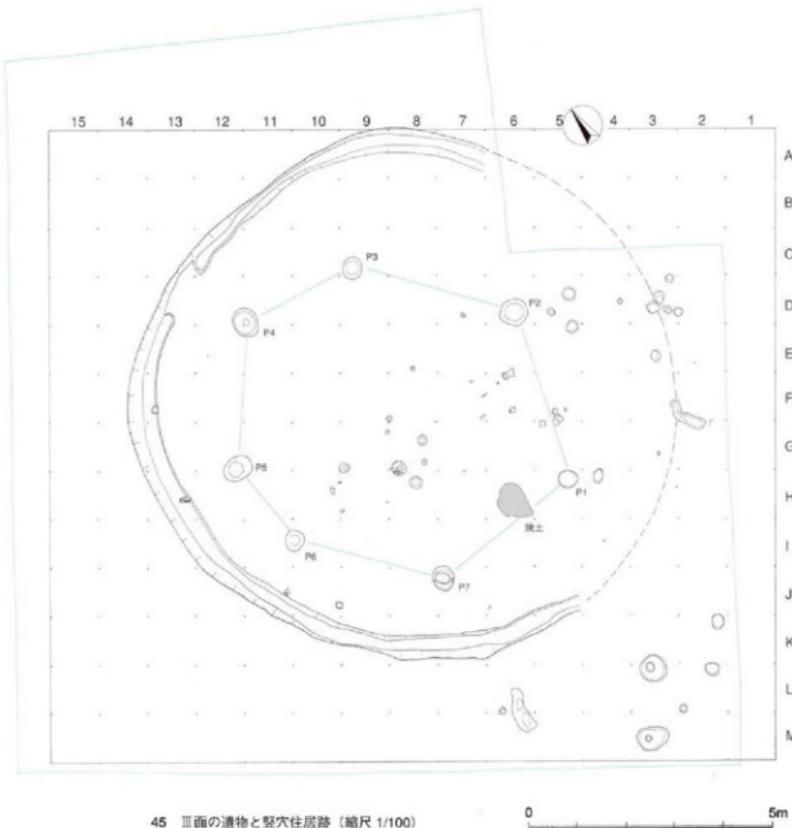
42 石錐



43 動物骨と石錐

3 堅穴住居跡の調査

9層の下に堅穴住居跡が現れたが、図45は床面に近い覆土中の遺物も合わせて作図している。堅穴住居跡の壁はK-10, J-11グリッド付近だけに残るのみであるが、円形に造った壁溝から南北 10.82m、東西 10.92m の円形プランであったことがわかる。壁溝は幅40cmで、床面からの深さは39cmを測る。北西部で一部途切れた箇所がある。東側は現在は認められないが、斜面のために自然削平されたのであろう。したがって東側の床面は旧状を保っていない。この部分を除くと床面はほぼ水平で、大小10数個のピットがある。このうち主柱穴と思われるものはP-1～P-7の7個で、西側の壁際に偏っている。これらは直径38～64cm、深さ31～55cmとやや規格性に欠ける。P-1とP-7の間で焼土が認められるが、床面は炉跡のように掘り込まれていない。遺物は丹塗り壺、甕、石剣、石錘、獸骨などがあり、これらは主柱穴に囲まれた床面中央部に集中している。堅穴住居跡の形状や出土遺物から弥生時代中期後半の時期に營まれたことがわかるが、拡張、切り合いがないことから長期間の利用を考えにくい。



45 Ⅲ面の遺物と堅穴住居跡（縮尺 1/100）

0 5m



46 壁穴住居跡（南から）



47 壁穴住居跡（東から）

4 竪穴住居跡の遺物

床面とその直上覆土から出土した遺物については、すべてを実測するように努めたが、土器4点と石器9点に止まった。

土 器 (6~9)

壺と甕の二つの器種が出土した。6は袋状口縁壺で、口縁部を住居跡中央に向けていた。いま胴部を欠いているが、周辺には接合する破片はなかった。器面は黄褐色で、ほとんど磨滅していないことからすると、当初より丹塗りではない。口縁部外面は横ナデ、頸部は縱ナデ調整、内面にはしばりで凹凸が目立つ。胎土はわずかに砂粒を含み、精良ではない。口径13.2cm。7は胴下半部を欠いており、床面に座った状況で出土した。背の低い口唇状断面の突帯が胴最大径部に2条、頸部の上下に各1条巡っている。頸部から反転して外に開く断面鰐先状の口縁部は、厚みのある作りで、その外端部は突帯と同じように口唇状となっている。口縁部内面から外面の胴部まで丹が塗られ、頸部は縱方向の磨きで暗文風の効果が出ている。口径20.2cm、胴最大径30.2cm。8は口径35cmの広口壺である。砂粒が少ない胎土を用い、器壁も薄く、外面は丁寧なナデ調整を加えており全体に美しい。丹塗り痕は認められない。9は柱穴から出土した甕の破片。口縁部は、上面が平坦となるL字形で、口径は26cmと復元できる。口縁部下に断面三角形の突帯が1条巡る。図示していないが、同じような甕が壁溝内に落ち込んだ状況で出土している。

石 器 (1~8)

石剣、石鎌、石鋤などの8点があり、石鋤以外は床面から出土した。1の石剣は、断面菱形で切っ先と基部を欠いている。わずかに風化しているが、研磨された刃部は鋭さが残る。石材不明。2は粘板岩質の石材で、石包丁のように両側から研ぎ出された刃部を持つが、直刃で紐孔もないことから別用途を考えるべきだろう。3、4は黒曜石製の石鋤。竪穴住居跡推定線よりも外側で出土したが、地山面に接していることから一応住居跡資料とした。5~8は石鎌。分類については後述するように6、7はI a類、8はI b類。5は石鎌未製品と推測される。いずれも滑石製である。



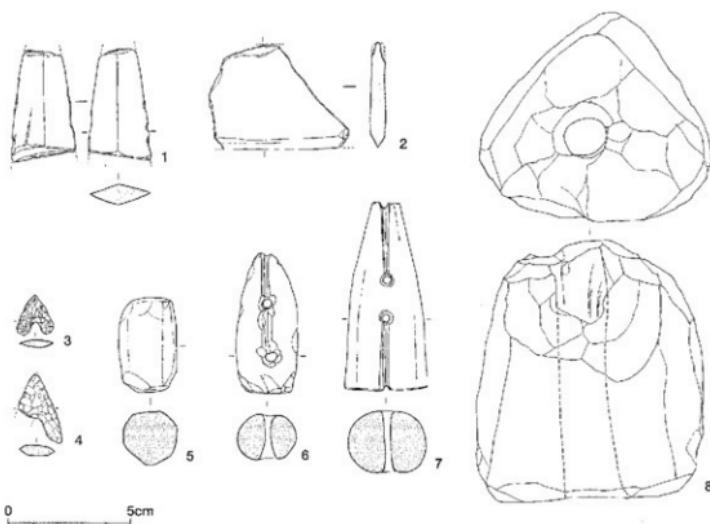
49 壁溝出土の壺



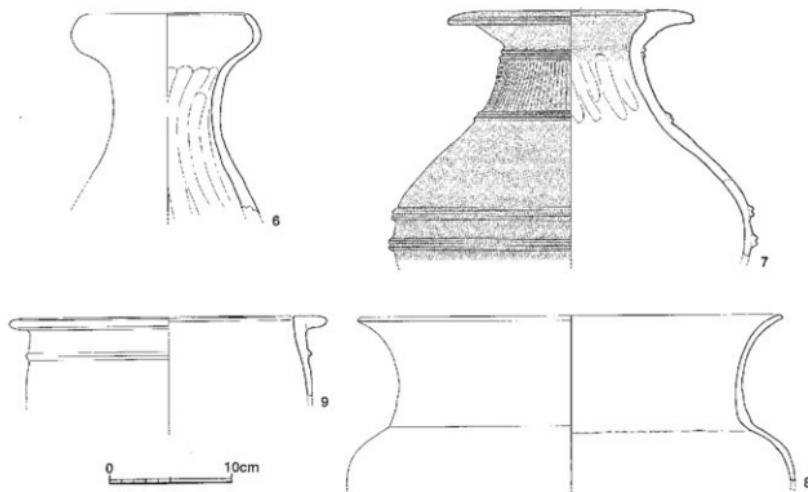
50 床面出土の壺 (6) と石鎌 (6)



51 床面出土の壺 (7)



52 石器 (縮尺1/2)



53 壺・甌 (縮尺1/4)

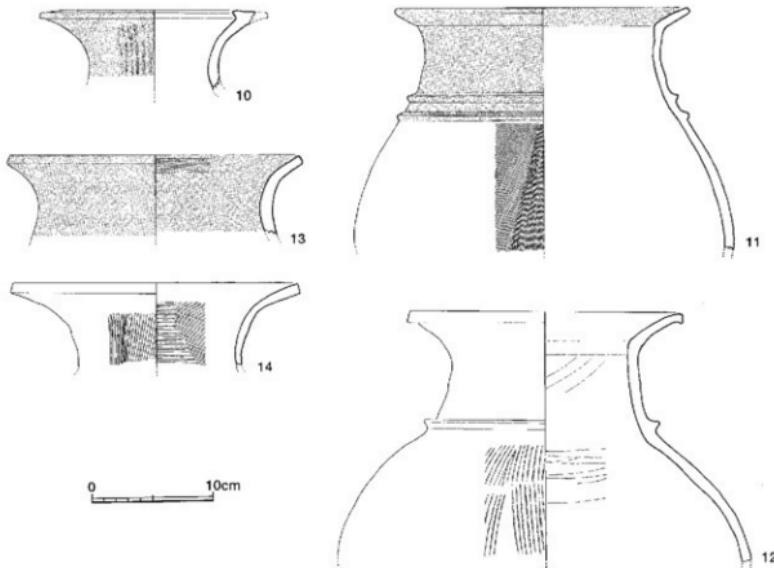
5 I、II面の遺物

豈穴住居跡土上部の土層は、質感、色調、遺物包含量の違いなどから実測図のように6層と7層とに分け、各層から出土した遺物をI、II面として整理作業を進めた。しかし、下層である7層の遺物が古い時期を示す傾向にはあるが、土層観察のように明瞭に区別できなかった。これは先述したように遺物投棄（？）に間断がなかったことを物語っている。土層認識と矛盾することであるが、ここでは両面の遺物を合わせて壺、甕、高坏、鉢、器台の器種ごとに記述する。なお器形の特徴を説明する上でいくつかの分類を行ったが、これは土器型式の変遷を示すものではない。

壺（10～40）

岡化した31点の壺を口縁部と頸部の違いから、I類=朝顔状に大きく開く広口のもの（10～12・38・39）、II類=袋状の二重口縁（15～29）のもの、III類=その他のもの（30～37）の三つに大きく分けた。

I類 10の肥厚した瘤状の口縁部は、わずかに外端部が下方に傾く。口径18.8cm。外面は丹塗りで綵ミガキを加えた部分が暗文風になっている。胎上は小砂粒多く精良ではない。11、12は頸部の溝曲が直線的でII縁への移行が内面に稜を持って屈曲している。11は口径24cm、胴下半部を欠いているが、倒卵型となるのであろう。丹塗りはII縁部内側から突帯までか。胴外面は細かなハケ目を施す。12の胴部外面は粗いハケ目条痕、頸部と胴部内面は板状の道具でナデ調整。口径22.8cm。11とよく似ているが、II縁部が長く、頸部が断面方形でやや下方に垂れるなどの特徴は、市内周辺の弥生土器には珍しい。13、14のII縁部は単純に外に開く。口径は13は24.4cm、14は23.6cmを測る。内方ともハケ目はナデ消しきされている。14の胎土は砂粒を含んでいるが堅硬である。胴部との接合部で脱離している。



54 I、II面の遺物 壺 I類（縮尺1/4）

15、16は広口であることからI類に入れたが、胴部上端部破片の17と合わせて山陽、山陰系の土器と思われる。15は口径22.4cm、外傾する幅広の口縁部を作り、5条の沈線を巡らせている。ただ横ナデを加えているので、浅く鋸さがない。小砂粒を多く含み、外面は茶色となる。16の口縁端部は下方に垂れ、櫛歯で半円を上下に繰り返し描く。口径24cm、砂粒は白色で、濃茶色の焼成となっている。17は胴上半部に2条の断面三角突帯を貼りつけ、刻み目を入れている。壺II類の突帯が頸部下端につけるのに対し、17は胴部上端といふ違いがある。

I類 口縁部の折り返しが丸みがあるもの（18~20）と強く屈曲するもの（21~26、30~32）がある。

18の胴部は球形で最大径は31.7cmである。径17.4cmの口縁部は小さく内湾する。胴部に対し突帯が巡る胴部と頸部の移行部近くは器壁が厚い作りとなる。19の頸部は綿まりがなく、外側に丸く膨らんだ口縁部がつき、長梢円形の器形となる。頸部と胴下半部は指押さえ風のナデ調整。器高17.1cm、口径7.6cm。20は径19.6cmの口径の削りには頸部が短いので詰まった感じがする。内傾する口縁部は横ナデ、他はハケ目調整。

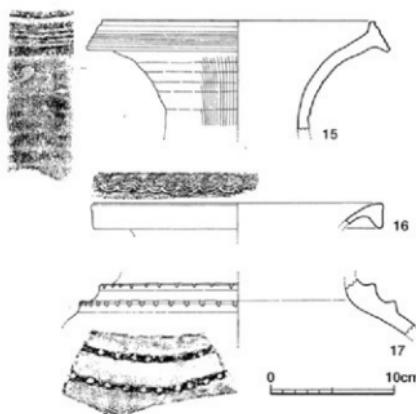
21の口縁部は断面台形状で、口径

10.5cm。頸部外面は縦方向の細かいミガキ後に丹塗り。22~24はほぼ同じ口径で、作りも類似している。24は口縁部折り返しが短く断面長方形に近い。25も同じように断面長方形の口縁部で、内傾度が弱い。口径24.7cm、粗いハケ目の後に細かいハケ目を加えている。特に口縁屈曲部内面のハケ目は特徴的である。26の頸部はよく綿まり、下部に三角突帯を2条巡らせている。27は波状文のある口縁部である。口径26cmに復元図化したが、小破片であり、また他のII類にくらべ器壁が薄く、別の器形を考えるべきか。28は径8.6cmの壺底部で内面は指押さえの凹凸が目立つ。動物絵画のある32と同じように外面にX印のヘラ記号がある。29の波状文のある破片は、ハケ目の調整方向や破片の傾きなどから壺胴下半の部位を想定した。

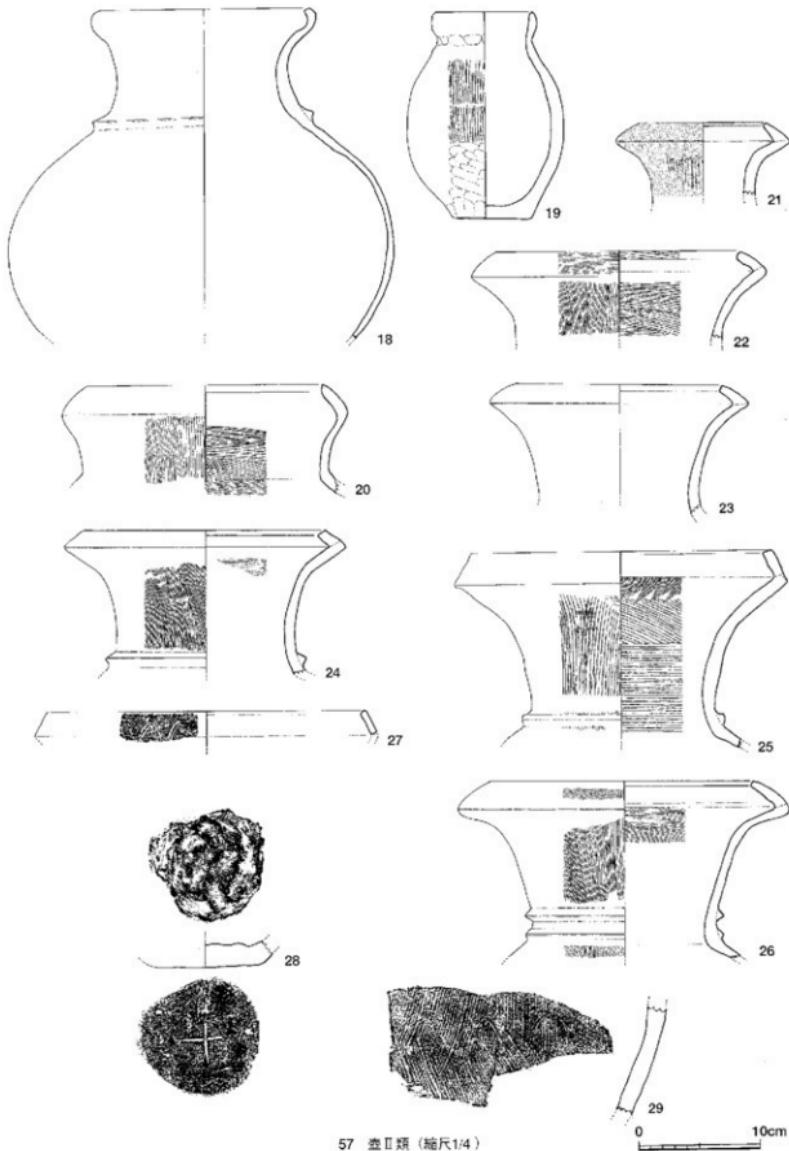


55 壺I類

12



56 壺I類（縮尺1/4）

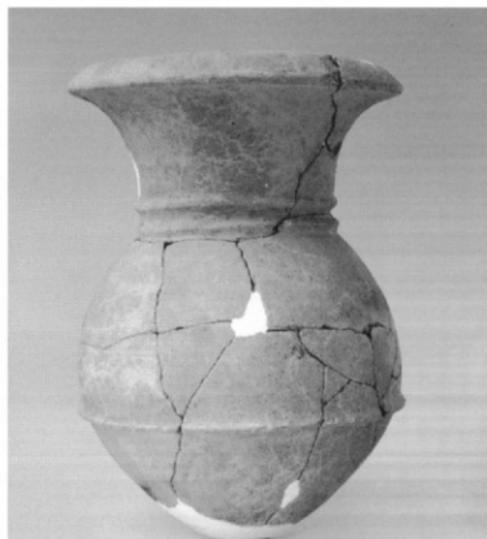


57 壺Ⅱ類 (縮尺1/4)

30~32の3点は接合完形となった壺で、大きさは表の通りである。

(単位cm)				
No.	口径	胴最大径	底径	器高
30	25.6	27.9	7.7	37.4
31	27.8	27.6	8.3	39.8
32	22.2	28.0	9.4	39.1

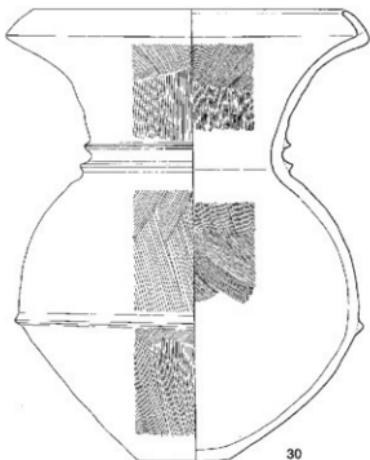
類似点も多いが、それぞれ微妙な違いがある。30は胴径に対し、背が低い。胴最大径は中位にあり、ここに1条の突帯を巡らせる。断面は先端が丸みがあり三角形に近い。底部はわずかに膨らんでいる。内面は細かいハケ目、外面は粗いハケ目と使い分けているが、そのハケ目は調整順序を観察できる。31は胴部が楕円形になり、頸部も長く、直に立ち上がる。口縁部は厚みがあり、強く屈曲している。器面の調整は頸部内面は粗いハケ目、外面は細かいハケ目。頸部下端に三角突帯を2条、胴部中位に断面台形の突帯を1条巡らせる。32はI区G-6 グリッドで1mの範囲に破片になって出土したもので、復元して1個体になった。取り上げ時には気がつかなかつたが、胴上半部に1頭の動物が描かれ、底部にX印のヘラ記号がある。動物はハケ目と同じような細い線で右向きに輪郭だけが描かれている。前足の足元は破片で失われている。後ろ足から耳先までの高さは8.2cm、鼻先から尻までは7.0cm。首を伸ばし、顔を真っ直ぐ正面に向け、耳を立てたその姿は、何か危険なものを察知して、警戒しているような緊張感を感じられるし、穏やかな体の線は、草原で立ち止まり、物静かに遠くを見ているような印象も与える。この絵画土器については、すでに報告しているように、犬、鹿、馬などの動物



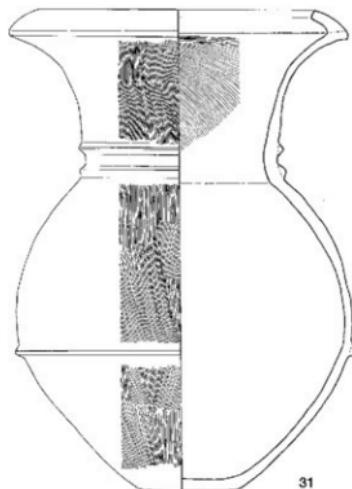
31



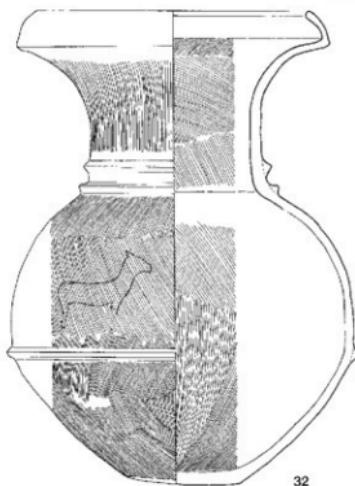
58 壺



30



31



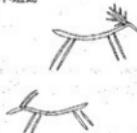
32



59 壺 (縮尺1/4)

0 10cm

吉武高木遺跡



赤穂ノ浦遺跡



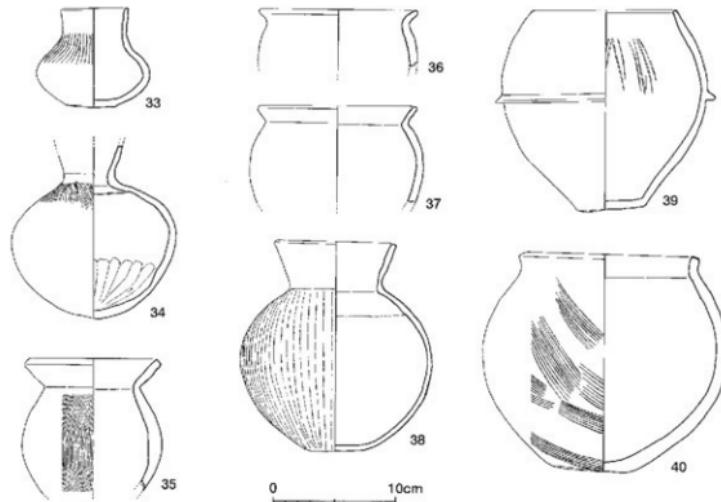
那珂遺跡



60 弥生時代の絵画

が候補に上げられるが、いまだ種類を確定できていない。ただ土器に描かれた犬として岡山県津島遺跡と大阪府平野遺跡の例がよく知られているが、どちらも首が短いことから、本例を犬とするには違和感がある。では馬か鹿か。

その後、福岡市内では弥生時代の動物絵画例が3遺跡で発見されている。博多区赤穂ノ浦遺跡では、銅鋌鑄型に釣針と鹿が線刻されていた。最古の王墓と話題となった西区吉武高木遺跡では、弥生時代前期の小堀用櫛柄にヘラ描きの2頭の鹿が疾走していた。また博多区那珂遺跡第23次調査で弥生時代中期の無頸壺に鳥を描いた例が発見された。那珂遺跡以外は鹿であり、全国的に見ても確かに鹿の例が多いが、本例も鹿と断定することはできない。ところで弥生人たちはめったに土器に絵を描かないが、装飾土器、漆、鋳造など高度な技術を持っており、決して芸術性が乏しかったわけではない。むしろ吉武遺跡例の鹿は、単純化された線だけで的確に鹿の形態的特徴も躍動感も描ききっており、稚拙ではない。小篠遺跡の動物絵画も、そのようにして描かれたはずであるが、私たち現代人には、残念ながら弥生人と同じような動物の特徴を見抜く目がない。なお、尻部近くの背で線がずれているが、これは描き損じたものと判断していたが、尻尾とも理解されることから、図を訂正しておく。本例は、耳、長めの剣、首、顔、そして尻尾? が絵画的特徴であり、底とは区別できそうである。



61 壺口類 (縮尺1/4)

III 類 33~40はその他の壺で、頭部の有無や長短などさまざまな形状がある。33は小型の直口壺。器壁は薄く、調整も丁寧である。器高8.2cm。34の頭部はよく縮まり、直線的に外反してそのまま口縁部となる。胴部は球状で、底部内面は指で強くナデ上げて丸底を作る。35~37はく字形の口縁部を持つ。どれも丸底になると思われるが、脚がつくかもしれない。37は丹塗りの可能性がある。口径は13cmである。38は34と同じように球形の胴部であるが小さな底部がつく。頭部は縮まりがなく、口縁部の開きも大きい。胴部は綾ミガキで、風化のために砂粒が露出している。器高17.4cm、口径10cm。39は無頭壺。倒卵形の胴部に径5.3cmの平底がつく。胴中位の突帯は断面台形で下方に垂れている。胎土はわりに緻密で他の土器と異なる。40は直立する短い口縁部がつく。胴部外面は粗いハケ目調整を部分的に加えている。内面はナデ調整。器高17.8cm。焼成はよく、器面は灰茶色を呈する。

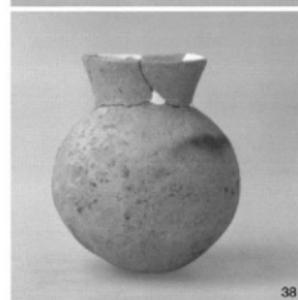
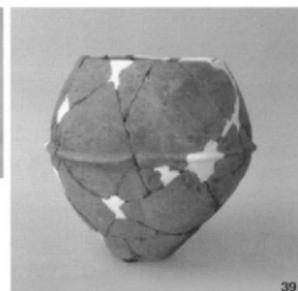
壺 (41~76)

口縁部、胴部、底部などの形状や作りなどでI~II類に分けた。また脚台がつくものをIII類、山陰と思われる外来系土器を別に分けてIV類とした。

I 類 (41~47) 弥生時代中期の壺で、L字形の口縁部をもつ。またその底部と思われるものも含めた。

41の口縁部は、内側にも小さく張り出し、その上面は丸く脹らみ、わずかに内傾している。口縁下方の三角突帯は横ナデされて積が鈍くなっている。胎土に砂粒が多いが、器面は丁寧なナデ調整で砂粒の露出は少ない。口径30cm。

42~47は平底であることから壺I類の底部としたが、44と47は立ち上がりが外湾気味にのび、壺の底部の可能性がある。45は底径7.5cm、外面は粗いハケ目調整。2号トレンチで出土した。44は緻密な胎土で、外面は丹塗りが施されている。

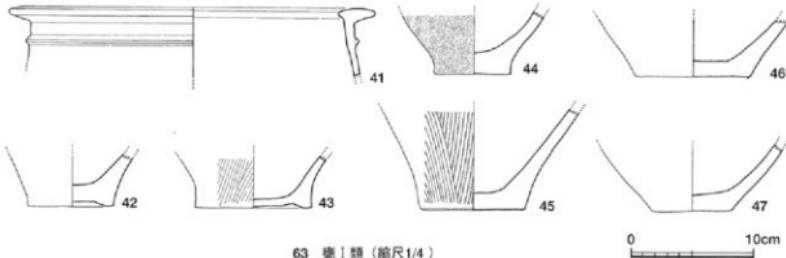


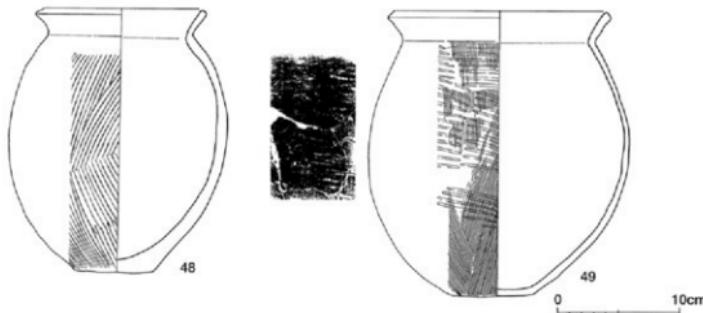
62 壺

39

38

63 壺I類 (縮尺1/4)





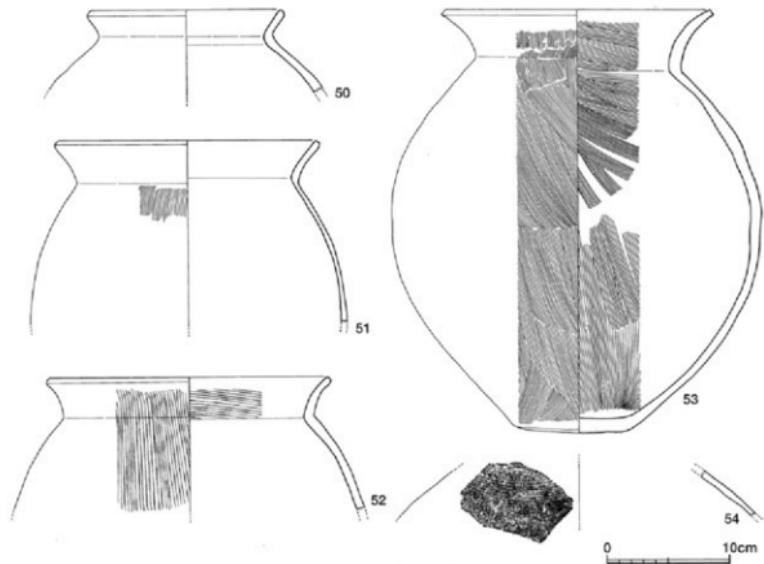
64 漢II a類 (縮尺1/4)



II 類 弥生時代後期の甕に特有なく字形口縁をもち、底部がレンズ条に膨らんでいるものをII類とした。さらに胴最大径が中位にあって口径よりも大きいものをa類(48~54)、最大径が上部にあって倒卵形に長胴になるものをb類(55~71)とした。

II a類には、胴が長く、口縁部が短く直線的に外反するもの(48、49)と、胴部に丸みがあり口縁部が湾曲しながら長くのびるもの(50~54)の二つに細分できる。

48は口径14cm、器高21.6cm、頭部の屈曲はにくく、口縁端部も断面が丸い。底部は平底に近く、胴部への立ち上がりはわずかに締まってから上方にのびる。内面は砂粒の露出がほとんど見られず、丁寧なナデ調整となっている。外面は粗いハケ目調整で、上、下半でその方向を異にしている。49の底部は径6.8cmで脹らみは弱い。胴部へは締まらずそのまま立ち上がる。胴部は48よりもさらに丸みがあるが顕著ではない。口縁部は通常の厚さであるが、胴部はタタキで均一な厚さとなっている。底部近くにはタタキはない。外面は横のタタキ後に細かい縦ハケ目調整を加えており、底部にもハケ目が見られる。口径18.3cm、器高23.4cm。胎土は砂粒が含まれているが、表面にはほとんど認められない。赤褐色の色調は本遺跡では数少ないので目立つ。



66 要Ⅱa類 (縮尺1/4)

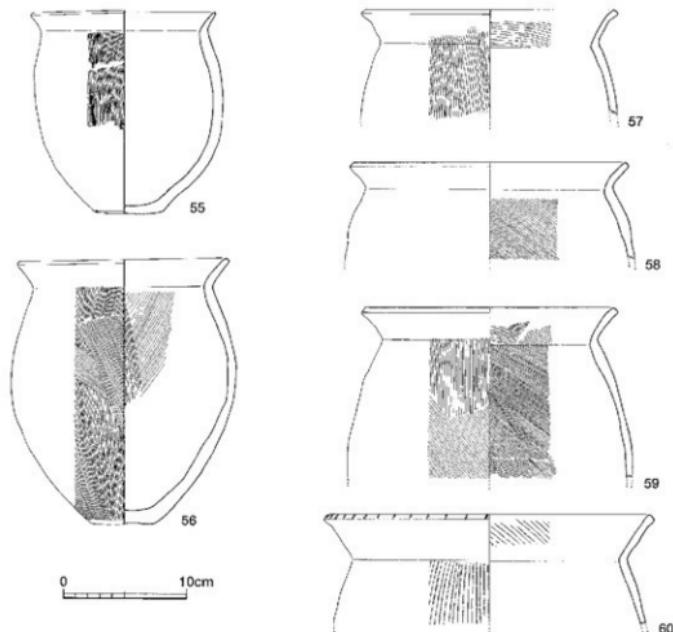
50は同類の土器にくらべ口縁部のびが短く、胴部の張りが強い。口径15.6cm。51と52は同じように肩の張りがなくなり、長めの胴部となる。51の口縁部は直線的で、3.6cmと長い作りである。胴部外面の調整は板状の工具で何度もナデを繰り返している。口径21.2cm。52は器壁が薄く、口縁端部は小さく外窪して丸みのある断面をつくる。53は接合して完形となった。口径21.1cm、器高35cm、胴最大径30.2cm。口縁屈曲部は鈍い稜がつき、口縁端は浅い凹状をなす。調整は内外面とも細かいハケ目で、内面は逆時計回りに調整している。54は破片だが胴の肩部と判断した。外面に9本の条線が巡っており、他の分類にすべきか。



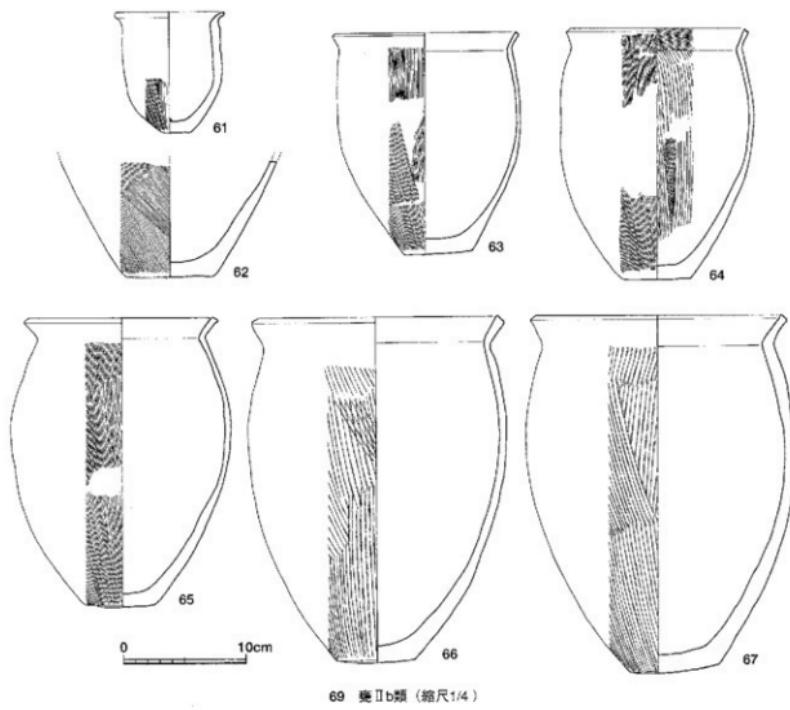
Ib類 同じ特徴をもつ17点を図示したが、細かく観察すると次の三つに細分でき、割り付けを別にした。

1. 腹最大径の位置が中位近くにあり、肩に張りがなく口径が腹最大径より小さいもの。口縁部の屈曲は内面に鈍い稜がつき、口縁端部は丸みがある。(55~60)

55, 56は接合完形品。55は口径15.1cm、器高16.8cm、底径5.7cm。この類では小型の甕で口縁部は小さく抓み上げたかのように短く外反する。底部は膨らみ不安定である。器面は赤茶色で煤が付着している。56は口径17.3cm、器高21.8cm、底径5.2cm。腹部内面のハケ目調整はナデ消し。57は口径20.4cm、口縁端部でさらに小さく外反する。58は口径22cm、腹部内面の調整はハケ目のように右上がりにナデを加える。焼成はよく明茶色を呈する。59は口径21.1cm、口縁端部が回状になっているのが特徴である。器面の調整は内面が細かいハケ目で、外面が粗いハケ目と使い分けている。60の口径は27cm、この類の中ではもっとも直線的な口縁部である。その丸みのある端部は小さく肥厚し、1.5cm間隔で斜めの浅い刻み目を入れている。胎土に小砂粒を含み、器面の色調は茶色。

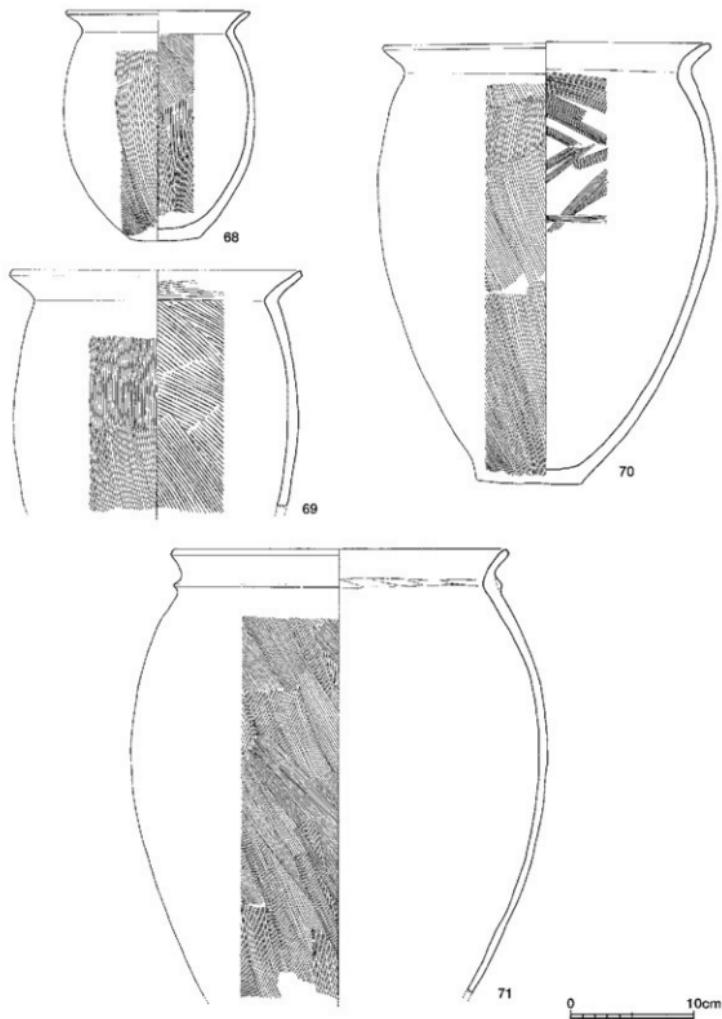


68 瓢IIb類 (縮尺1/4)

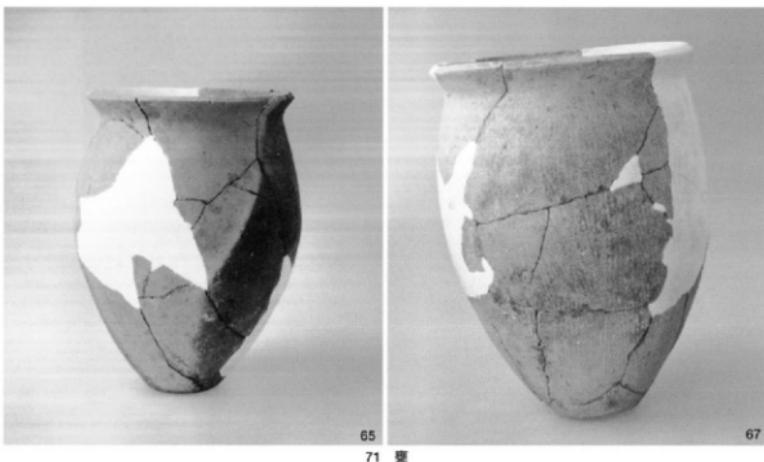


2. 脇最大径は中位よりやや上方にあり、肩に張りがある。口縁屈曲部の内面の稜はシャープになり、口縁部端部の断面が方形に近く、ほとんどが四状となるのが特徴である。また脇最大径がII径よりも大きい。(61～67)

61は砲弾形の胴部に小さく外反する口縁部をつけた小型號で、この類では成形自体が異質であるが形狀の類似だけを加えた。II径9.5cm、器高9.9cm。底面は押さえで径2.2cmの不安定で小さな底部を作る。63は口径15.4cm、器高18.2cm、底径5.5cm。器面は通常の調整を施しているが、底部と口縁部との軸がずれている。64、65は大きさ、胴部の張り、四状のII縁部などきわめて類似している。64は口径15.4cm、器高18.2cm、底径5.5cm。胴部内面は細かいハケ目の上に粗いハケ目で調整している。65の胴部には全体に黒斑が見られる。66、67は一回り大きく、肩の張りが弱いのでスリムな姿をなす。66はII径20.7cm、器高28.3cm、底径6.5cm。外面は粗いハケ目を施しているが、器面への砂粒の露出はなく調整は丁寧である。口縁部は肥厚し、内邊は上方に小さく突出する。67の口縁部内端も跳ね上げ気味の断面である。口縁部内面の調整は右上がりの粗いハケ目を横ナデで消している。胴部外面は粗いハケ目。底部の膨らみは強いがまだ丸底になりきっていない。II径21.1cm、器高29.3cm、底径7.3cm。胎土は小砂粒を含み、器面は薄い灰茶色となる。



70 横IIb類 (縮尺1/4)

65
71 裂

67

3. b類と同じように長胴であるが、口縁部は丸みもって屈曲し、湾曲しながら伸びる。屈曲部外面に三角突帯を巡らせるものや、胴最大径が口径に近いものなどがある。(68~71)

68はこの類では小型で、口径15.2cm、器高18.1cm、底径5.5cmを測る。底部にもハケ目調整を施している。69は肩に張りがなく、23.6cmの口径より胴最大径が1mm小さいだけである。器面の調整は内外面とも粗いハケ目で、内面は時計回りに上方から下方に調整している。70は全体の2%の破片が無い接合完形



68



72 裂

70



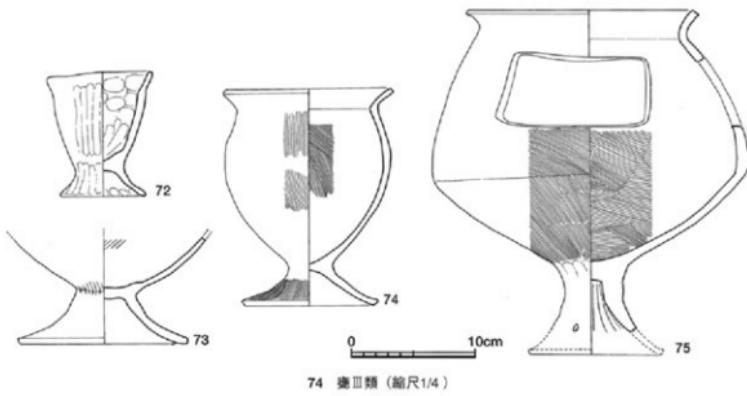
73 瓢

71

品。口径27cm、器高36.6cm、底径8.9cm。胎土には小砂粒が多いが、焼成はよい。外面のハケ目調整は縦方向に4段あり、内面は胴上半部だけに方向の違うハケ目を交差させている。底部は粘土が剥離して凹凸が目立つ。71の口縁部は変形し、長径29.7cm、短径27.8cmの楕円形になっている。口縁屈曲部は内外面とも強く横ナデし、外面の三角突帯は棱がなくなっている。内面も押さえで凹凸になっている。

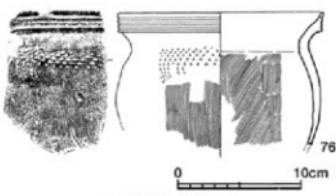
III 類 (72~75) 脚台が残る4点を脚台付甕として図示したが、上部本体の形状はさまざまである。

72は器面には指押さえ痕が明瞭に残る手捏ね土器である。左右対象に図化しているが、全体にいびつで、口縁部も波うっている。普通の焼成で、灰茶色を呈するが、粗雑な印象は否めない。また胴部は眼込みがなくグラス状の器形であるから甕とするには適当でないが、脚台が付くことからこの類に加えた。73も本体下部が大きく外湾することから鉢の可能性がある。器面は内外ともナデ調整で、脚台接合部と胴部内面に粗いハケ目が見られる。脚台は径14cmと大きく開いている。74は口径14cmの甕に脚台がついているが、甕II b類の56と同じような特徴をもっている。径11.2cmの脚台は背が低く、本体の甕とよくバランスがとれている。器高は17.8cm。75は脚台の一部を欠いているがほぼ完形である。本体は脚台接合部から大きく開きながらび、中位より下方で反転して偏球状の胴部をつくる。口縁部は丸く屈曲し、端部は65、66のように凹状となる。脚台の内面はシボリ痕が残り、3か所に径6mmの小孔が開いている。器面の調整は外面が細かいハケ目、内面は細かいハケ目。口縁部から胴上半部外面にかけては横ナデ調整。この調整の後に胴上半部のほぼ中央に縦5.8cm、横12cmの方形の窓を開けている。整理作業で同類の土器破片を慎重に探したが、窓開き土器はこの1点のみである。

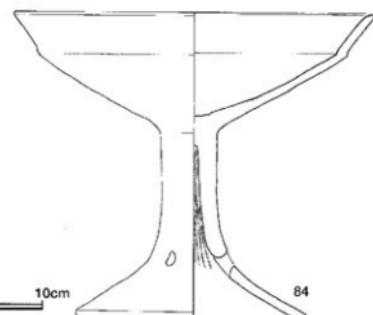
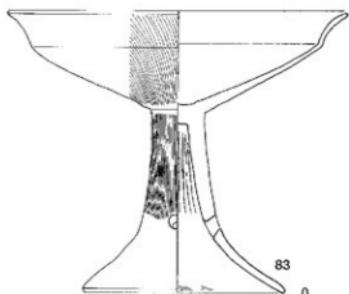
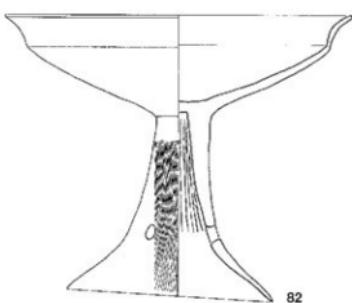
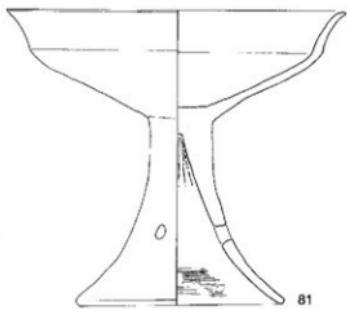
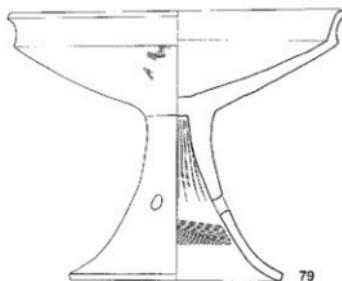
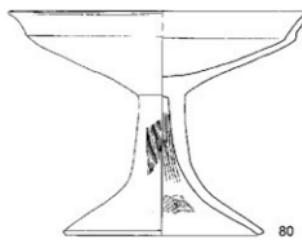
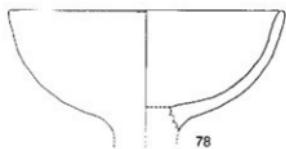
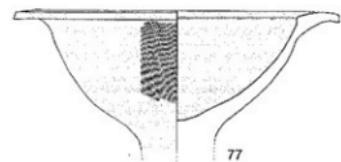


M 類 (76) 山陰系の土器と考えられる壺が1点だけ発見された。

76はI区F-5 グリッド1面で破片になって出土した。周辺グリッドの土器片をすべて精査したが、胴下半部は見出しができなかった。胸部は肩の張りがなく、そのまま底部にすぼまるのであろう。頸部は緩やかに湾曲し、端部は上下に幅広く拡張して複合口縁部をつくる。ここに3条の凹線を平行に巡らせている。胴肩部には工具を回転させたような三角形状の押圧文が巡っている。胴部は内外面とも細かいハケ目調整。このような特徴は、山陰地方の土器に見られるもので、特に島根県江津市波来浜遺跡の土器によく類似している。ただ山陰地方の壺内面がケズりであることは大きな違いである。口径と胴最大径は同じ16.9cmを測る。



77 壺IV類 (縮尺1/4)



78 高环 (縮尺1/4)

0 10cm

高坏 (10~40)

高坏は他の器種にくらべて破片でも容易に見分けができる、またその脚柱部によって個体数も知ることができる。しかし、今回は整理作業が完全でなく、正確な個体数をカウントすることができなかった。また実測も12点に止まった。図化した12点については主に坏部(受け部)の形状によって次のように鶴先状口縁部で弥生時代中期後半のI類と、坏部上方で屈曲して口縁部が外に聞く弥生時代後期のII類に大別した。II類はさらに口縁部の立ち上がり角度、坏部深さに対する口縁部の長さ、口径の大小などによってa、b、cに細分した。しかし、完形品がある場合は特徴的な形状のものを優先的に実測したので、図示した各類の点数がそのまま各類の出土点数の比率を示すものではないことを断っておく。

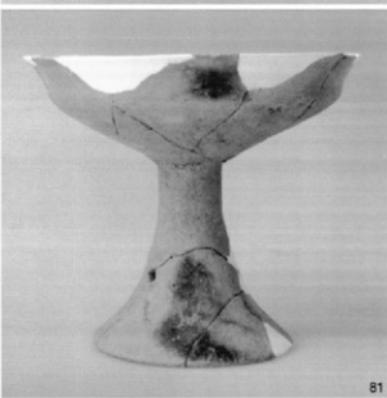
I類 (77, 78) 半球状の深い坏部で、断面鶴先状の口縁部がつくか、あるいはそのまま口縁部となるもの。脚部は失われているので知りえないが、長めの柱状になるのであろう。丹塗りされることが多い。77は口径26.6cm、深さ9cm。分厚い作りの口縁部は、上面が平坦でなく丸みがあり、内端部が小さく突き出し稜線が入る。外面は細かなハケ目調整の後に丹塗り。78は口径22.8cm、深さ8cm。胎土はわずかに砂粒を含むが精良ではない。中程より口縁部にかけては横ナデ、他はナデ調整。丹塗りもなく特別丁寧ということではない。

II類 (79~88)

IIa類 (79, 85) 口縁部が直立ぎみに立ち上がるるもので79と85の2点がこれにあたる。79は口径26cm、器高22.5cm、脚幅17.2cm。坏部、脚裾部とも器壁が厚く、脚裾部は安定感のある開き方をしている。口縁部は屈曲が強く、湾曲しながらのびる。全体にナデ調整されているが、坏部外面と脚部内面に部分的に残っている。脚裾部の中位に3個の小孔が開いている。85はD-10グリッドの溝状落込みから出土した。口径29.8cm、深さ9.4cm。口縁部の作りや立ち上がりは、よく80に似ているが口縁部の長さが坏部の約2分の1を占



80



81

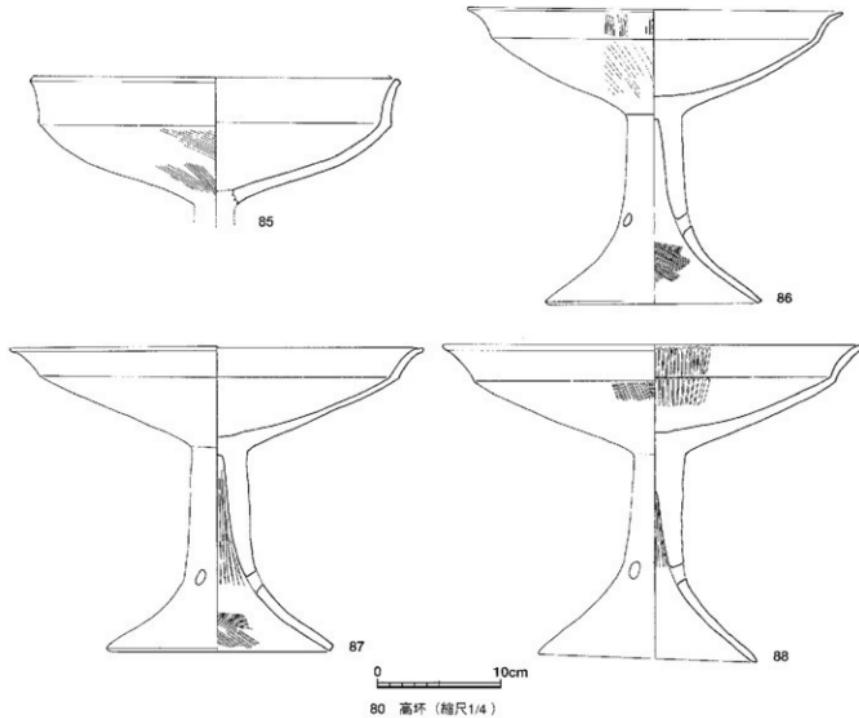


83

めている。坏部下半は粗いハケ目の後に中心から放射状にナデ調整をしている。内面に黒斑が見られる。

II b類 (80~83) 口縁部の立ち上がりが斜めになり、外湾しながらびる。裾部は大きく開き、柱状部と境をつくる。80は坏部の中位よりや上方で屈曲して、直線的な口縁部となる。端部は小さく引き出している。坏部底はミガキ調整。口径25cm、器高18.4cm、脚裾径16.6cm。脚裾部には小孔は穿たれていない。坏部が浅く、全体の小型であることが他と異なる。81は他の高杯にくらべ胎土の砂粒量が多い。口縁端部は水平で外端は小さく尖る。脚裾部のカーブは滑らかで、ほぼ中央部の3か所に小孔がある。82、83は強く湾曲した口縁部は、端部が先丸になり、裾部も内側に膨らむなど細部にわたって共通点が多い。82は坏部と脚部の接合はズレている。全体に茶色だが坏部内面だけが赤茶色を呈する。口径28.4cm、器高23.7cm、脚裾径16.8cm。83は5mも離れて出土した破片が接合した。口径28cm、器高23.2cm、脚裾径16.8cm。

II c類 (84、86~88) 口縁部の立ち上がりは、傾斜が弱く直線的にのびるものと、外湾するものがある。器形が一回り大きく、坏部が深い。脚部は円柱状となり、裾部との境に小孔があるのが特徴。84は口縁部が直線的ということもあって坏部が深い。口径29.4cm、器高25.3cm、脚裾径18.9cm。86の口縁部はb類に近似しているが、大型化していることからc類とした。87と88の口縁端部は水平に引き出されている。88の坏部は放射状に細かいヘラミガキ調整の後にナデを加えている。口径34.1cm、器高26.6cm、脚裾径18.2cm。



80 高坏 (縮尺1/4)

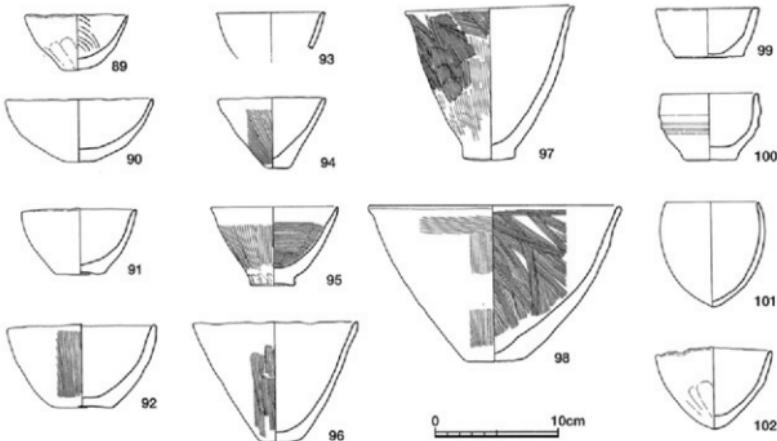
鉢 (89~115)

鉢は大きく四つに分けた。I類は手捏ね土器風の小型のもの。II類は半球状の胴部で特に口縁部のないもの。III類はく字形の口縁部をもつもの。IV類は外反する長い口縁部をもつものである。

I類 (89~102) 図示したのは14点に過ぎないが、本遺跡の特徴として小型鉢の出土数が多い。それぞれ形状が異なり、分類は難しいが、胴部が偏球状で内湾するもの (89~93)、三角形の胴部に不安定な小さな底部がつくもの (94~98)、背の低い胴部に平坦な底がつくの (99、100)、底部が尖っているもの (101、102) に細分できる。

鉢 I類法量表 (cm)

No	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102
口径	8.5	12.2	9.4	12.2	9.0	8.9	10.4	13.6	14.0	20.9	8.6	8.0	7.6	9.6
器高	4.7	5.2	4.2	6.9	5.8	6.5	10.0	12.5	12.8	4.1	5.6	8.7	6.8	



81 鉢 I類 (縮尺1/4)



82 鉢

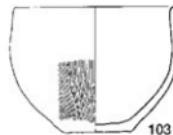
II類 (103~107) 脊部が半球状の鉢をⅡ類としたが、脣上半部が直線的に立ち上がるものの (103、104) と脣上半部が内湾気味のもの (105~107) の二様がある。103は脣下半部と平底の底部にハケ目調整。104の口縁部は厚みがあり、端部は丸くおさめている。底部は脹らみ、丸底に近い。105は口縁部近くで内湾し、口縁部は波うっている。内面は上下のハケ目を時計回りに調整する。外面に黒斑がある。106は脣下半部がなじみ、破片の傾きからすると丸底がつく形状と思われる。内面だけにハケ目調整を施す。107は器形が大きく、平坦な口縁部が特徴。平底にもハケ目調整を加える。胎土には小砂粒を含み、器面は茶色である。

III類 (108~114) 弥生時代中期のI.字形口縁がく字形に変化したもので、器形は大小があり、底部も平坦なものや丸底気味のものまである。

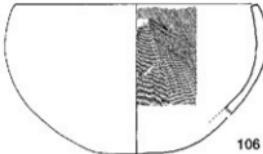
108は小型で手捏ね風だが、精良な胎土を用い、外面は丹塗りである。小さな底部は円盤状で脣部と明瞭な境がある。器壁は厚く、そのまま外反して口縁部となる。外面ともに調整時 (?) の条線が残っている。109も底部は円盤状で、脣部中位からわずかに内傾しながらびているので、口径14.2cmの割には背が高い。胎土、焼成とも良好。110の口縁部は丸く屈曲する。口縁部は横ナデ、脣部はナデ調整。111の口縁部はのびが短く、丸い端部となる。外面は縱方向の粗いハケ目調整。112は接合完形。脣上半部の内傾は弱く、口縁部

鉢法量表 (cm)

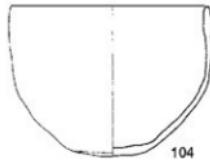
No	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115
口径	13.2	16.2	15.1	20.0	29.6	10.1	14.2	19.5	23.4	29.0	24.9	44.0	22.4
器高	10.0	11.8	14.0		16.4	6.7	9.2	10.8	13.7	16.5	18.1	30.2	11.9
底径	5.5	5.4	4.6		9.2	4.1	4.0	4.7	7.4	8.2	7.3	103	4.0



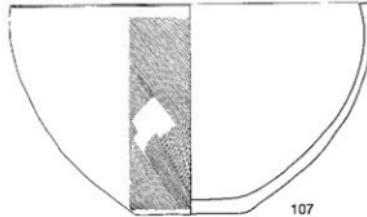
103



106



104



107



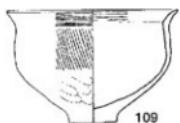
105

83 鉢Ⅱ類 (縮尺1/4)

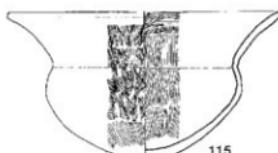




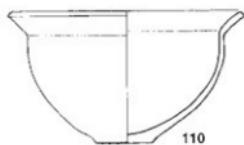
108



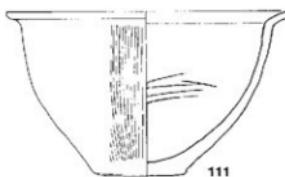
109



115



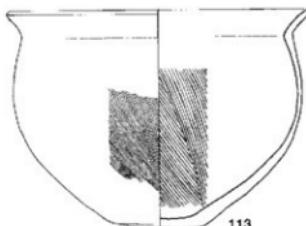
110



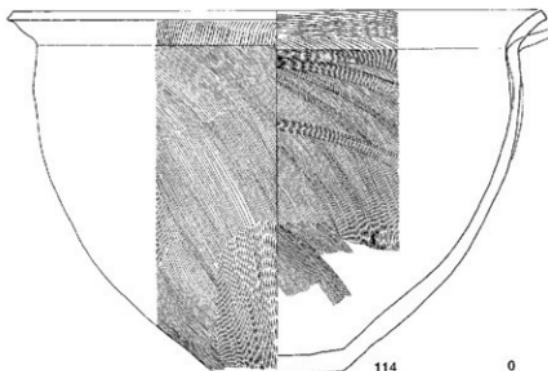
111



112



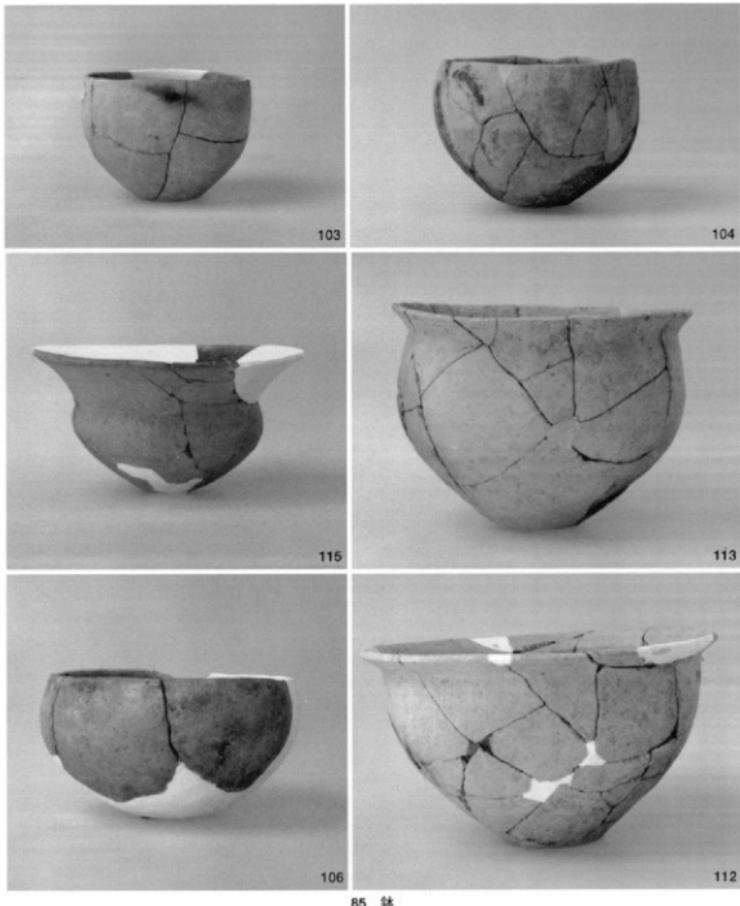
113



114

0 10cm

84 鉢Ⅱ類 (縮尺1/4)



は直線的で細身のつくりとなる。113 の胴部は109 と同じように中位に張りがある。底部は張らみが強く不安定である。114 の口縁部は40cmを超す大型鉢。口縁部は丸く屈曲し、断面方形の口縁端部は凹状となる。一部が片口状に窪んでいるが、不整形であることから乾燥時の変形か。器面の調整はきわめて丁寧である。

M 類 (115) 口縁部は外面が縦の細かいハケ目、内面は上方が横ハケ目、下方が縦ミガキ。胴外面は横の細かいハケ目の後に縦のハケ目を重ねている。内面は縦の粗いハケ目を上下2段に繰り返している。このよう に器形だけでなく調整法も他の鉢と著しく異なり、むしろ弥生時代後期の高杯に類似するものがある。外面は赤褐色だが内面は黒色となっている。

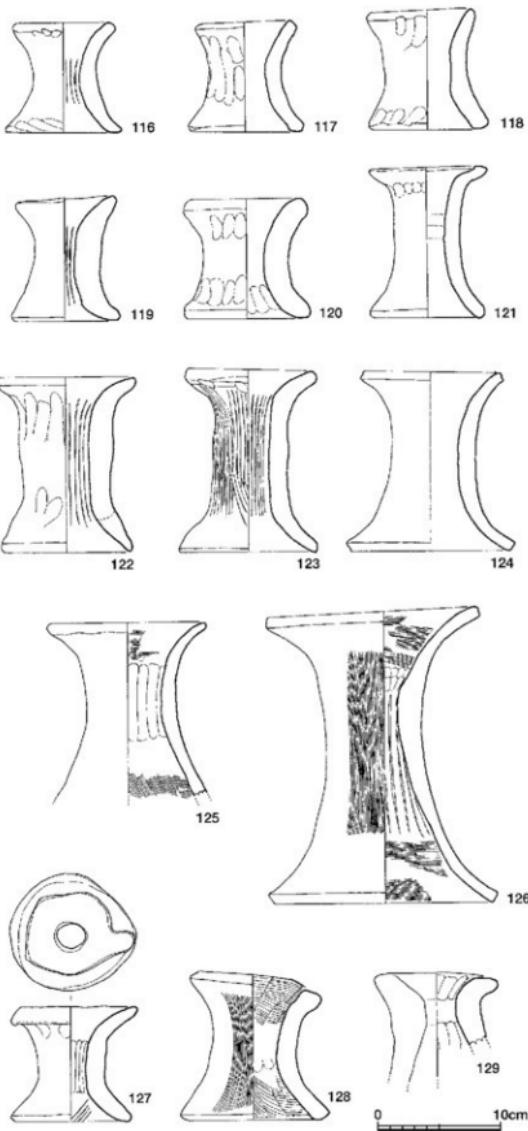
器台 (116~137)

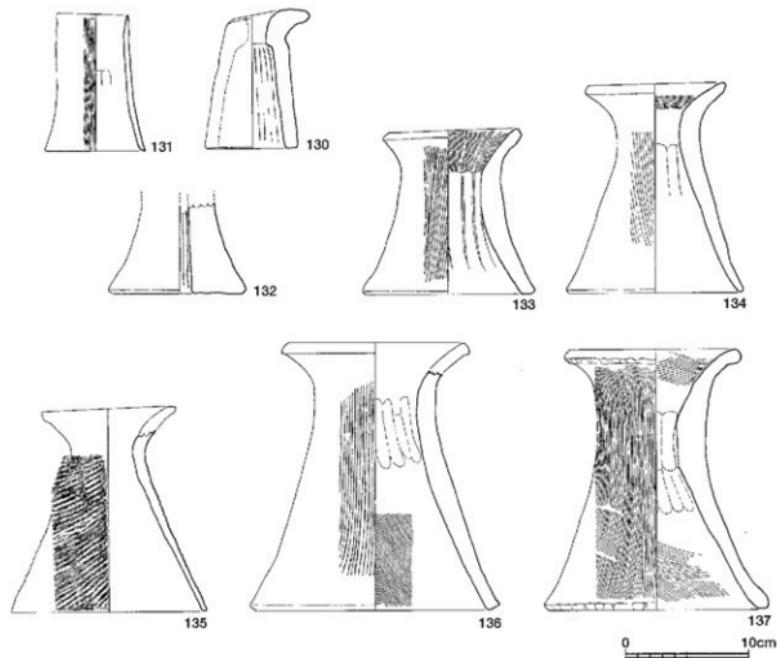
厚手の作りのために割れにくいこともあって完形品の点数が多く、22点を実測した。1個体で使用する器台と数個が組合わさせて用いる支脚があり、その機能で分離すべきだがここでは形状の違いで3類に分けた。

I 類 (116~126)

上下が同じように開く鼓形で、受け部と脚部の径がほぼ等しいものをI類とした。成形も調整法も規格性に乏しいが、器高からすると116~120は10cm内、121~124は15cm前後、126は24.2cmという大、中、小がある。

119は中位で強く括れるが上下の径は大差ない。上、下外端部は指押さえの後ナデ、内面にはシボリ痕が目立つ。121~124は背が高い分、中央が円柱状になる。裾部は微妙に内湾して接地する特徴をもつが、124だけは異なり、緩やかに湾曲してのびている。また器面の調整も丁寧である。125は裾部を欠いているので器高がわからないが、126に近いのであろう。126の受け部が軸より傾いている以外はよく整った器形となっている。内外面ともハケ目はナデ消しされている。





87 器台Ⅱ・Ⅲ類 (縮尺1/4)

Ⅱ類 (133～137) ハ字形に聞く剖部の上方が縦まり外に湾曲して受け部となる。したがって上径よりも下径が大きい。器高や括れの度合いなどによって細分ができる。器面の調整法は同じ手法が施されているが、135だけは外面が右上がりのタタキである。内面は裾部から上方の順にハケ目調査。器壁はタタキのために凹凸が目立つが、裾部に向かって薄くなっている。砂粒の少ない胎土が用いられ、外面は赤茶色である。

Ⅲ類 (127～132) 支脚と思われる一群で、受け部が正円ではなく、また一方に傾いているもの。また131、132のように特異な形状のものも含めた。127は中央に径2.3 cmの孔が貫通し、受け部は粘土を折り曲げて周縁を盛り上げている。131は薄手の作りなので器台には適していないが、他に例がないのでこの類に加えておく。132の外形は通常の器台そのものであるが、中央に1 cmの穴が開いているだけで分厚い器壁となっている。

器台法量表 (cm)

N ₂	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126
上径	8.4	8.3	8.9	8.3	10.3	9.7	11.0	10.8	11.4	12.9	17.2
底径	9.6	9.3	9.8	8.9	10.4	9.6	10.4	11.2	13.0	18.2	
器高	9.1	9.1	9.9	10.2	9.9	12.7	14.9	15.2	14.8		24.2
N ₂	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137
上径	10.4	10.9	10.2	6.8	5.8	10.5	11.6		15.4	14.7	
底径	9.9	12.3		7.7	8.2	11.5	14.2	14.6	18.0	20.6	18.2
器高	9.4	12.0		11.4	11.3	13.7	17.2		22.0	21.4	

土器番号対照表

- Fig.とNo.は、本書での土器の図面番号と通し番号を示している。
- 取上Noは、遺跡での取り上げ番号である。土器は接合可能なもの、特殊な器形のものなど942点は番号をつけた。942点が土器の総量を示すものではなく、その他の遺物は各グリッドで層位ごとに取り上げている。
- 登録Noは、福岡市埋蔵文化財センターでの収蔵番号である。小萍遺跡の遺跡番号である7616を頭につけることによって、他遺跡の遺物と区別され、検索できるようになっている。

頁	Fig.	No.	グリッド	出土面	断面	分類	取上No	登録No	頁	Fig.	No.	グリッド	出土面	断面	分類	取上No	登録No
8	15	1	1 F			鉢	I	00037	32	61	37	D-13	III	直	II	638	00027
	15	2	1 F			鉢	I	00036		61	38	F-7	I F	直	II	810	00005
	15	3	1 F			鉢	I	00038		61	39	E-12	II	直	II	855	00095
	15	4	2 F			鉢	II	00039		61	40	F-11	I F	直	III	660 664-5 724	00090
	15	5	2 F			壺	II	00125		61	41	E-11	III	直			
26	53	6	F-6	住居床		壺	II	940	33	63	41	E-14	III	直	I	607	00019
	53	7	G-8 H-8	住居床		壺	I	939	63	42	L-6	I L	直	I	109	00033	
	53	8	D-7	住居床		壺	I	00060		63	43	H-12	II L	直	I	832	00034
	53	9	I-10	柱穴		壺	I	—		63	44	M-2	I L	直?	I	40	00136
27	54	10	D-13	III		壺	I	645	63	45	Z-14	II F	直	I	—	00076	
	54	11				壺	I	—		63	46	E-14	III	直	I	611	00032
	54	12	E-2 E-10	I 下 II 中		壺	I	405 929	63	47	E-8	I 上	直?	I	559	00030	
	54	13	H-12	II 上		壺	I	248	34	64	E-8	II 中	直	II a	873-4	00116	
	54	14	H-8	I 下		壺	I	434	64	49	E-7	I 上	直	II a	549	00121	
28	56	15	M-2	I L		壺	I	34	35	66	50	D-12	III	直	II a	679	00055
	56	16				壺	I	—		66	51	I-8	I 上	直	II a	136	00021
	29	57	17	H-8	II 上	壺	I	282	66	52	H-19	I F	直	II b	486	000433	
	57	18	G-10	II 中		壺	II	—	66	53	H-8	II 上	直	II a	283	00080	
	57	19		溝上		壺	II	—	66	54	F-7	I F	直	II	—	00009	
	57	20	F-2	I F		壺	II	400	36	68	55	G-7	I 上下	直	II b	774	00065
	57	21	F-8	II 中		壺	II	870	68	56	G-3	II 上	直	II b	326	00137	
	57	22	J-10	I 上		壺	II	176	68	57	H-10	I F	直	II b	498	00056	
	57	23	G-11	II 上		壺	II	262	68	58	G-3	II 上	直	II b	324	00023	
	57	24	J-8	I F		壺	II	—	68	59	G-8	II 上	直	II b	—	00011	
	57	25	J-8	I F		壺	II	—	68	60	I-4	I 上	直	II b	14	00138	
	57	26	G-3	II 上		壺	II	323	37	69	61	F-3	II F	直	II b	899	00117
	57	27				壺	II	—	69	62	H-8	II 上	直	II b	861	00031	
	57	28	F-3	I F		壺	II	602	69	63	K-7	II 上	直	II b	217	00083	
	57	29				壺	II	—	69	64	G-6	I 上下	直	II b	—	00097	
31	59	30	F-5	I F		壺	II	460	69	65	H-7	II 上	直	II b	—	00135	
	59	31	F-7	I 上		壺	II	533	69	66	E-8	II 中	直	II b	872-3	00130	
	59	32	G-6	II L		壺	II	306-8	69	67	F-10	II 上中	直	II b	827 907 915	00129	
32	61	33	D-9	I 上		壺	II	424	69	68	E-10	II 中	直	II b	919	00127	
	61	34				壺	II	—	70	69	F-5	I F	直	II b	789	00015	
	61	35	J-10	I F		壺	II	—	70	70	E-10	II 中	直	II b	921-2	00127	
	61	36	E-10	II 中		壺	II	923	70	71	E-10	II 中	直	II b	919	00139	

頁	Fig.	No.	グリッド	出土面	器種	分類	取上No.	登録No.	頁	Fig.	No.	グリッド	出土面	器種	分類	取上No.	登録No.
38	74	72	G-6	I 上	甕	II	-	00026	83	104	G-8	I 上下	鉢	II	289	00041	
	74	73	F-8	I 上	甕	II	597	00070		83	105	H-8	I 下	鉢	II	-	00100
	74	74	E-6	I 下 II 上	甕	III	792	00096		83	106	F-3	I 下	鉢	II	427	00002
	74	75	F-8	II 上中	甕	III	-	00064		83	107	F-11	III	鉢	II	722	00008
41	77	76	F-5	I 下	甕	IV	7856	00017	47	84	108	G-10	III 中	鉢	III	904	00108
42	78	77	F-5	II 中	高环	I	894	00094		84	109	G-12	II 上	鉢	III	239	00054
	78	78	F-6	II 中ト II 上	高环	I	875	00102		84	110	K-7	I 上	鉢	III	88	00089
	78	79	F-10	I 上下	高环	II a	479	00081		84	111	E-12	II 中	鉢	III	856	00091
	78	80	E-7	I 下	高环	II b	809	00103		84	112	E-11	II 上	鉢	III	848	00069
	78	81	G-10	I 下	高环	II b	737	00082		84	113	F-8	I 上	鉢	III	600	00063
	78	82	E-6	I 上	高环	II b	547	00107		84	114	G-8	I 上	鉢	III	776	00122
	78	83	F-2 E-7	I 下 I 上	高环	II b	397 553	00058		84	115	I-9	I 上	鉢	B	169	00050
	78	84	F-4 G-4	I 下 II 上	高环	II c	766 352	00061	49	86	116	E-11	II 上	器台	I	8534	00096
44	80	85	D-10	溝	高环	II a	-	00106		86	117	D-11	III	器台	I	700	00085
	80	86	F-7	I 下	高环	II e	8004	00093		86	118	G-8	II 中	器台	I	8678	00113
	80	87	E-7	I 上	高环	II e	542	00115		86	119	F-8	I 上	器台	I	591	00087
	80	88	H-6	II 上	高环	II e	304	00087		86	120	H-10	I 下	器台	I	489	00025
45	81	89	E-7	I ド	鉢	I	806	00120		86	121	E-7	II 中	器台	I	877	00105
	81	90	D-10	I 上	鉢	I	-	00077		86	122	L-2	I 上	器台	I	-	00112
	81	91	H-6	I ド	鉢	I	381	00041		86	123	F-7	I 上	器台	I	539	00104
	81	92	K-8	I 上	鉢	I	115	00046		86	124	F-10	II 中	器台	I	906	00013
	81	93	G-11	II ド	鉢	I	-	00098		86	125	L-6	I 上	器台	I	210	00001
	81	94	E-8	I ド	鉢	I	814	00012		86	126	E-10	II 上	器台	I	-	00114
	81	95	H-8	I F	鉢	I	485	00132		86	127	F-8	I 上	器台	II	599	00086
	81	96	H-8	II 上	鉢	I	277	00075		86	128	F-8	II 中	器台	II	869	00018
	81	97	G-9	II 上	鉢	I	366	00099		86	129	E-8	I 上	器台	II	562	00040
	81	98	E-6	II 上	鉢	I	-	00101		86	130	F-8	I 上	器台	IV	598	00078
	81	99	L-7	II 上	鉢	I	217	00119		87	131	F-2	I 下	器台	IV	403	00051
	81	100	L-2	II 中	鉢	I	-	00049		87	132	K-11	I 上	器台	IV	202	00002
	81	101	H-6	I 下	鉢	I	38	00004		87	133	F-10	III	器台	IV	744	00110
45	81	102	M-2	I L	鉢	I	36	00047		87	134	K-8	I 上	器台	III	117	00111
	46	83	E-10	III	鉢	I	76	00003		87	135		II 上	器台	III	-	00053
										87	136	D-10	II 上	器台	III	822	00109
										87	137	D-8	I 上	器台	III	555	00035

石 器

出土した石器には、石鍬、石剣、石斧、砥石、紡錘車、刃器、石鎌、玉類などがあり、特異なものとしては軽石が出土した。

石 鍬 (5~46)

豎穴住居跡の床面および包含層から、木製品を含め全部で41点が出土した。形態の特徴から次のように分類した。

I 類 孔と溝を有し、上端部が尖り気味にせばまり下端部が幅広の分銅型をなすもの。

II 類 分銅型をなすが、孔が無く体部下位から両側上端部まで溝を刻むもの。

III 類 全長12~14cm前後で、最大径が中央部にあり、上下端部がすぼまる紡錘型をなすもの。

IV 類 形態はIII類に似るが、全長2.5~5.0cmと小型で体部に縱方向もしくは十字形溝を両側に刻むもの。

V 類 偏平な滑石を用い、粗く浅い溝を刻むもの。

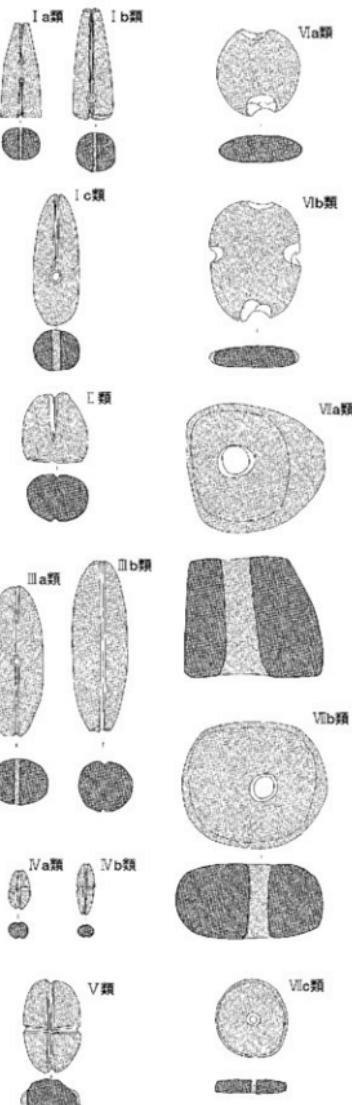
VI 類 偏平な拳大の自然礫の端部を打ち欠くもの。

VII 類 全体を円形に加工し、中央部に孔を穿ってドーナツ型を呈するもの。

I 類

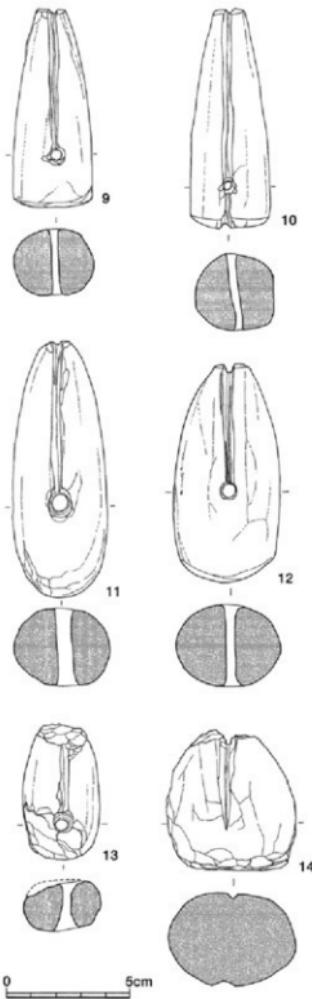
I 類はいずれも滑石を研磨したもので、下端部の形態・溝・孔の相違などから、さらに細分を行った。

I a 類 上端部と同様に下端部も水平に研磨し、中央部上下に2か所の孔を穿って溝をもつもので、6と7がこれに当たる。豎穴住居跡床面から出土し、本遺跡では最も古い時期に属するものである。6は丁寧な研磨が施されて端整なつくりで、上端部下端部とともに水平に研磨されている。体部中位の孔の間は1cmで、孔と孔の間に溝を通さず、上孔両側から上端部まで溝を通し、下孔両側から下端部まで溝を通している。溝は鋭く薬研彫りされている。7は小型のもので、粗雑なつくりである。側面はやや丸味をもち、下端部から下孔までの間隔は0.8cm、上孔との間隔は1.8cmと長い。溝は両側の下孔から上孔を通り、上端部まで通っているが、下孔から下位には刻まれていない。いずれも孔は身の長軸に対し水平に穿たれている。

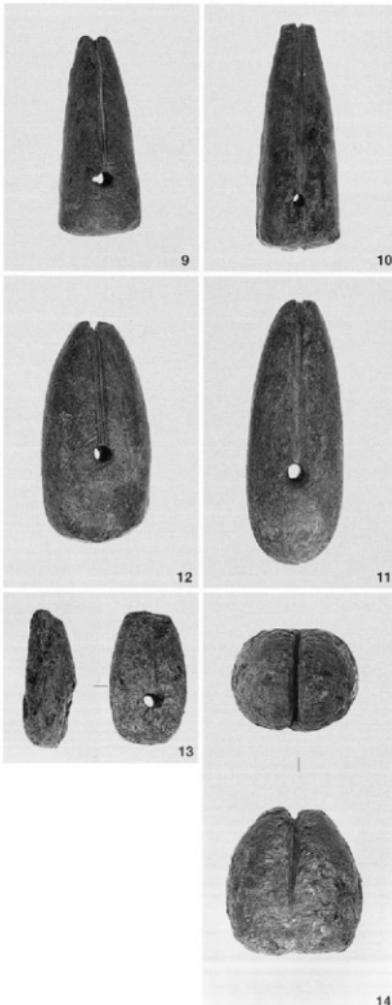


I b 類 形態は a 類と同様だが、下端部は水平ではなく、やや膨らみをもって研磨され、体部下半に 1 孔を穿つもので、9、10がこれに当たる。いずれも体部は丁寧に研磨され、溝は薬研彫りされている。10は溝が上端部から孔を通って下端部まで全周しており、11は孔より下部には溝が通っていない違いがある。溝の彫り方も、9 に比べて10は浅くなっている。いずれも孔は両側からやや斜めに穿たれている。

I c 類 全体に丸味をもって研磨され、下端部が丸いもので12~14の石錘である。11と12は形態は似ているが、11は細長く、12はずんぐりした形で、いずれも溝は深く鋭い。孔は両側から水平に穿たれている。13は小型の偏平なもので、やや粗雑な造りで孔は両側から斜めに穿たれている。



89 石錘 I b・I c・II 類 (縮尺1/2)



90 石錘

II類

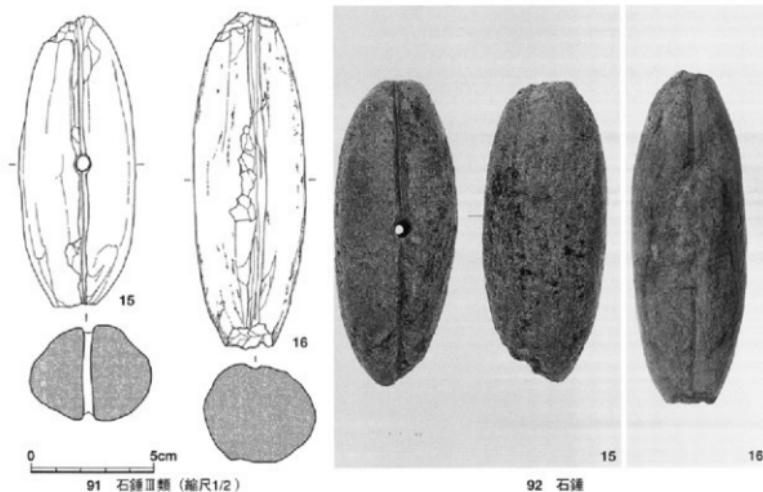
II類は14の1点だけである。滑石製で敲打面を多く残し、ずんぐりした分銅型を呈している。体部下半から上端部まで溝が刻まれ、溝は上端部が深く鋭く体部下半になるほど浅くなる。

III類

IIIは孔の有無で2つに細分した。

III a類 体部中央部に両側から孔を穿ち、深く鋭い溝を全周させるもので、15がこれに当たる。滑石を丁寧に加工したもので、両端部を欠損している。太めの筋錐型を呈す。

III b類 溝を全周させるものの孔が穿たれていない16のタイプである。やや赤味を呈する滑石を加工し、16に比べてやや細味である。溝は浅く彫られ、一方の端部から片面を一部欠損する。

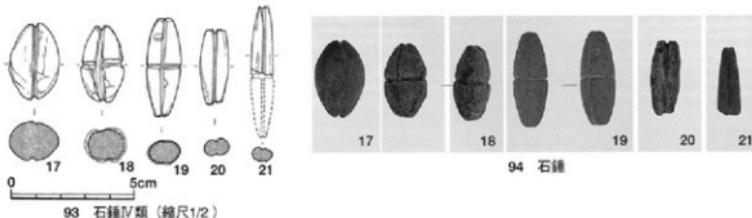


IV類

形態の相違から、2つに細分した。

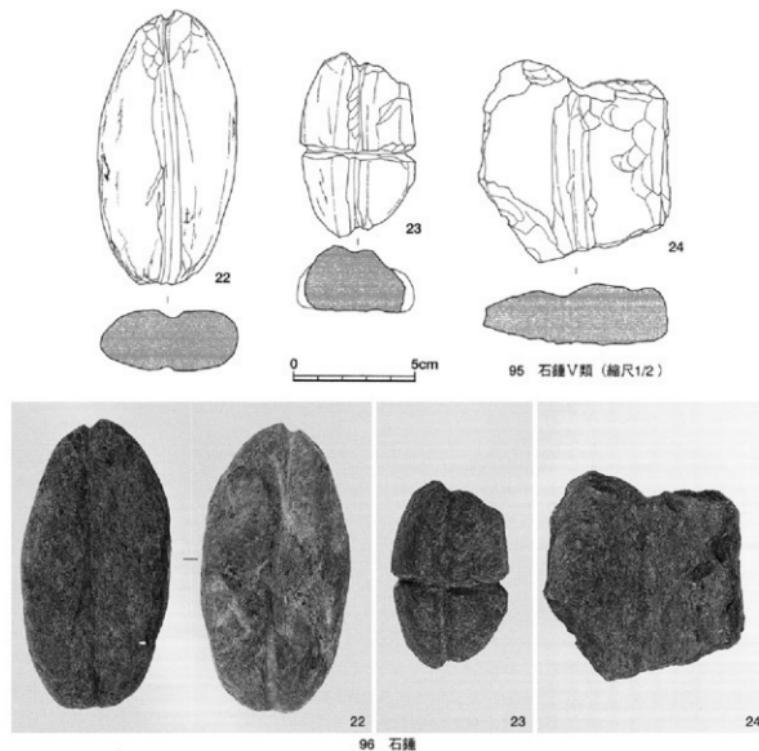
IV a類 細錐形を呈するもので、17~19のものである。18は縦方向の溝が全周し、18と19は十文字の溝が刻まれている。いずれも石材は砂岩で、19がやや細長いタイプである。

IV b類 小型で細長いタイプのもので、20、21がこれに当たる。20は滑石製で、溝は縦方向に全周する。21は半分を欠損するが十文字の溝を刻むもので、材質は硬質砂岩である。



V類

22~24がこれに当たり、いずれも滑石製である。22は偏平な滑石を橢円形に加工し、上端部から下端部まで縱方向の粗い溝を全周させる。23はやや小振りで断面は略三角形を呈し、表面に十文字の溝を刻むが平坦な裏面には刻まれていない。24は偏平な自然石に縱方向の幅広の浅い溝を刻む。一方の端部を欠損し、裏面に溝は刻まれていない。

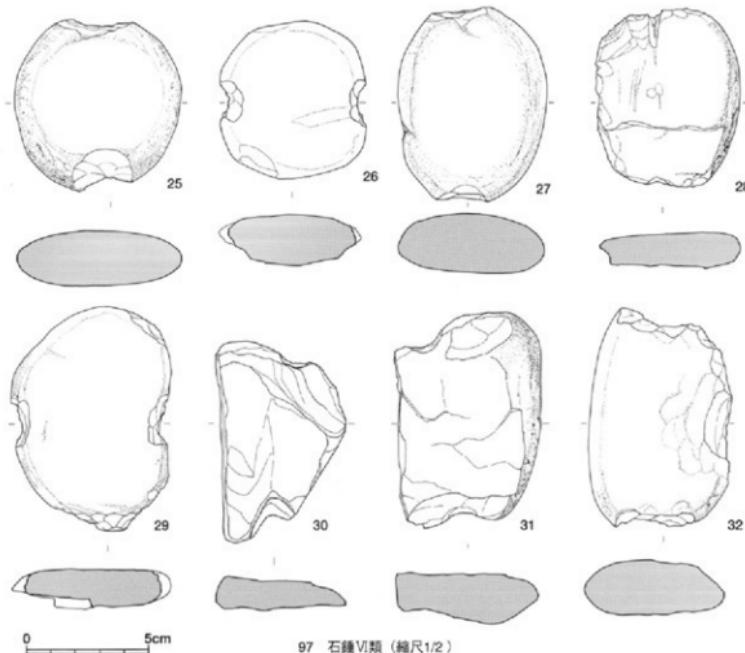


VI類

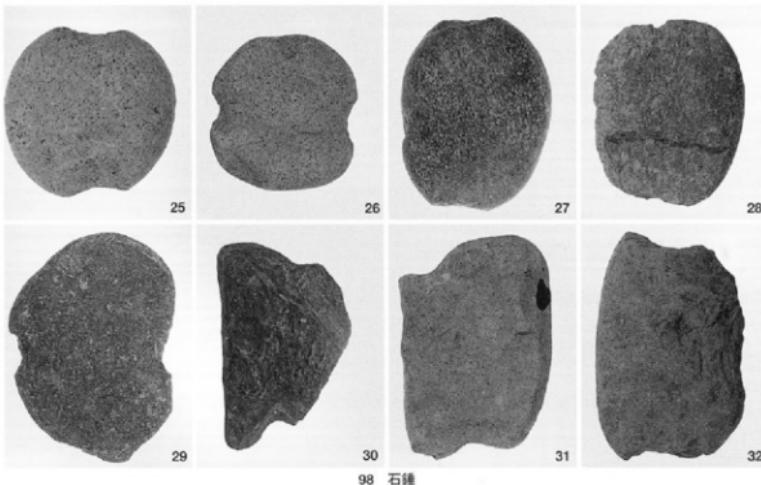
いずれも拳大の自然縞を用いたもので、打ち欠きの数から2つに細分できる。

VI a類 両端2か所を打ち欠いたもので、25~33がこれに当たる。25~29は円形、もしくは橢円形の偏平な縞の両端を打ち欠いたもので、25, 26が玄武岩、27が硬質砂岩、28, 29が粘板岩である。30~32は不整形な偏平石の両端を打ち欠いたもので、30が粘板岩、31, 32が玄武岩である。33は粗い縞岩の両端を打ち欠いたものである。

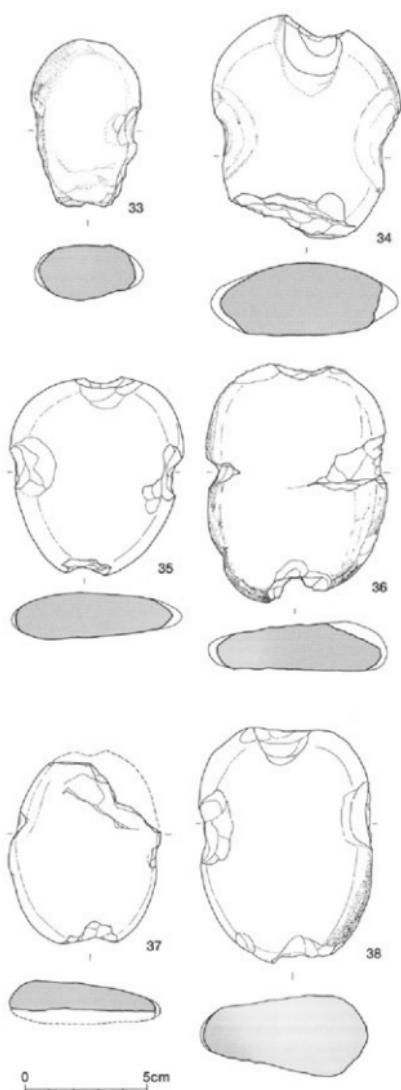
VI b類 対向する4か所を打ち欠いたもので、34~38が該当する。34と37が一部を欠損するだけで、他は完形である。34と35は玄武岩の偏平な円縞の4か所を打ち欠いたもので、34は一端を欠損する。36は偏平な滑石を用い、対向する4か所の端部を打ち欠くものである。37は花崗岩の小円縞を用いたもので、片面一部と裏面を欠損する。38は厚手の花崗岩縞を用い、対向する4か所の端部を打ち欠くものである。



97 石錐VI類 (縮尺1/2)

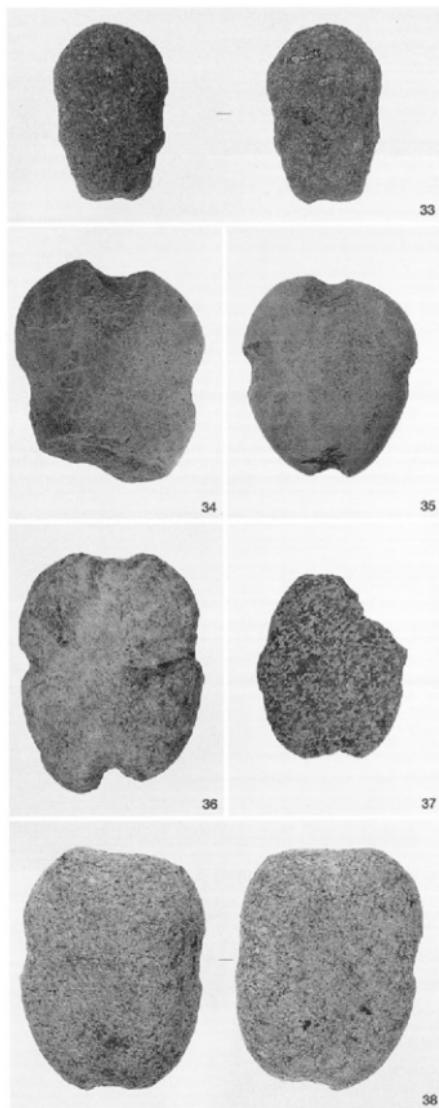


98 石錐



0 5cm

99 石錐 (縮尺1/2)



100 石錐

VII類

形態と大きさの相違から、3つに細分した。

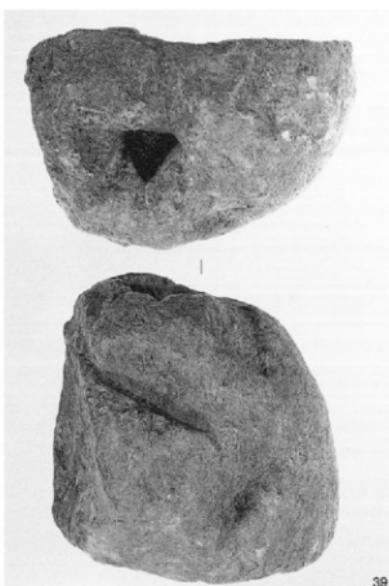
VII a 類 径に比べて高さが高い器台型を呈するもので、住居跡床面出土の 8 と 39 である。39は滑石を加工したもので、器の 3 分の 1 強が残存する。体部表面の 4 か所に凹状の打ち疵があり、孔径は上端部より下端部がやや広くなる。下端部は水平でなく内側に向けて迫り上がり、上端部はすぼまって本来は安定感があるものである。

VII b 類 径に比べて高さが低いドーナツ形のタイプで、径が 16.9cm の大型と中型の 40~43 のものである。43 は最も大型で、滑石を加工し上下両面を平坦に研磨している。中央部の孔はやや斜めに穿たれている。42 は蛇紋岩系の円錐を一部加工し、中央部に孔を穿ったものである。全体に丸味をもって仕上げられ上下両面とともに平坦面をもたない。中央部の孔は垂直に穿たれている。40、41 は中型の同じタイプのもので、どちらも滑石製である。40 は丁寧に研磨が施され、下面是平坦であるが上面はやや丸味をもって研磨され、中央部の孔はほぼ垂直である。41 は外面は敲打による仕上げで、ほとんど研磨は施されていない。下面是平坦で、上面は丸味をもつ。中央部の孔は斜めに穿たれている。

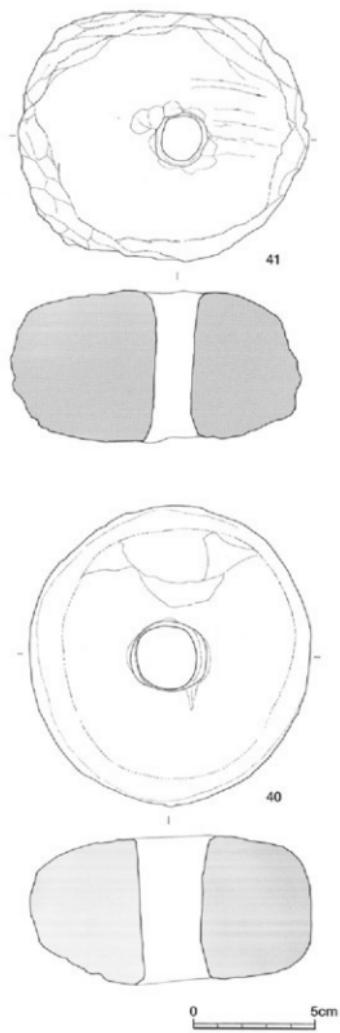
VII c 類 小型の偏平な滑石を加工したもので 44 のものである。全体に粗雑なつくりで、中央部に表裏両面から孔が穿たれている。



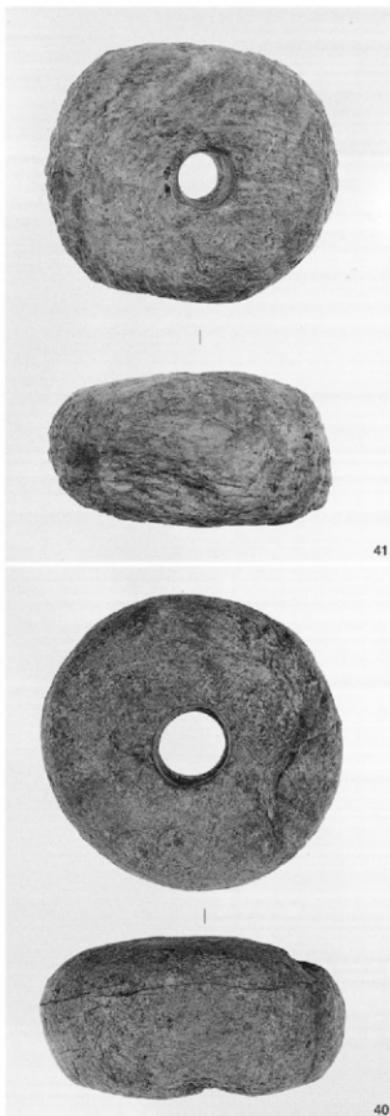
101 石錐VIIa類（縮尺1/2）



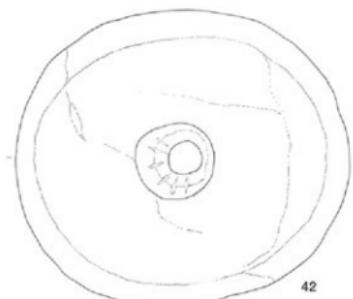
102 石錐



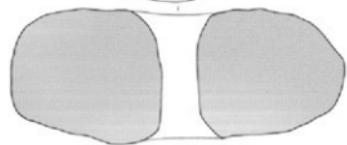
103 石錐VIIb類 (縮尺1/2)



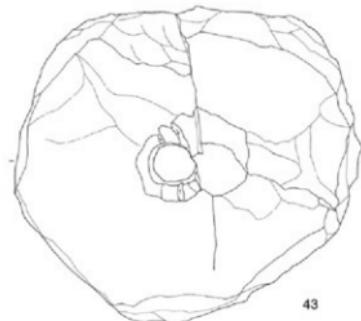
104 石錐



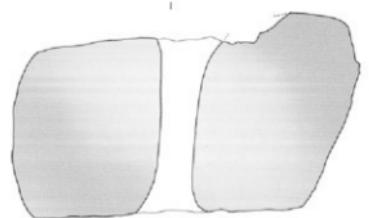
42



42



43



43

0 5cm

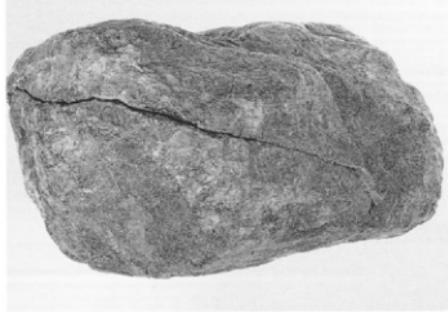
105 石錘 (縮尺1/2)



42



43



106 石錘

以上が完形および欠損品であるが、未製品として住居跡床面出土の5、包含層出土の45、46がある。いずれも滑石製で、I類の分銅型の石鍤製作過程のものであり、46は半分に削れている。

これらの石鍤のうち、有孔で孔から端部まで溝を通すI類は明らかに釣漁の沈子である。I類の中で下端部が平坦なIa類は海底が砂地である釣漁に使用され、丸味をもつIb類は海底が岩礁である場合に使用されたと考えられる。そのほかの石鍤は網漁に用いられた石鍤と考えられ、大小や形態の相違から、漁網の部位や種類に応じた工夫がなされたものと見られる。なお、自然の円錐を打ち欠くだけのII類は、筵編みなどの編み機の石鍤の可能性もあるだろう。また、大型でドーナツ型のIII類は、漁網を海底に固定する重しとして使用された可能性が高いが、延繩漁の先端につける鍤として使用されたことも考えられる。

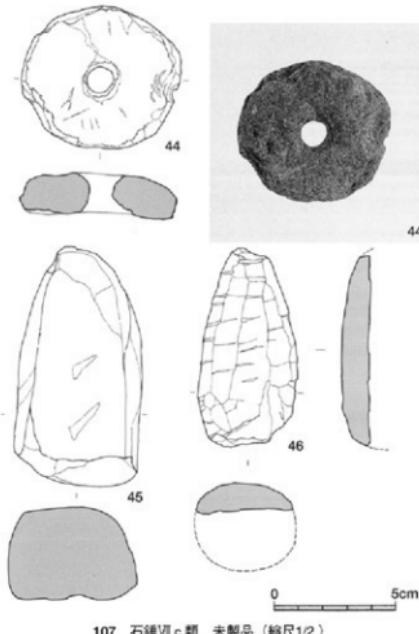
これらの石鍤のほかに、拳大や人頭大、さらにはそれよりも大きな円錐が多量に出土した。これらの自然石には加工の痕跡は見られなかったが、近年でも漁村に行けば、同じような自然石をネットで縛って山積みしている光景が見られ、それらは建網や定置網などの重しとして使用されるものである。本遺跡出土の自然円錐もそのように使用されたことが考えられるが、遺物としては取り上げなかった。

石剣(1)

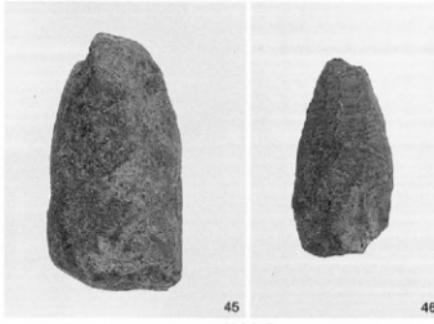
竪穴住居跡床面から出土した1点のみで、包含層からは出土していない。

石斧(47~49)

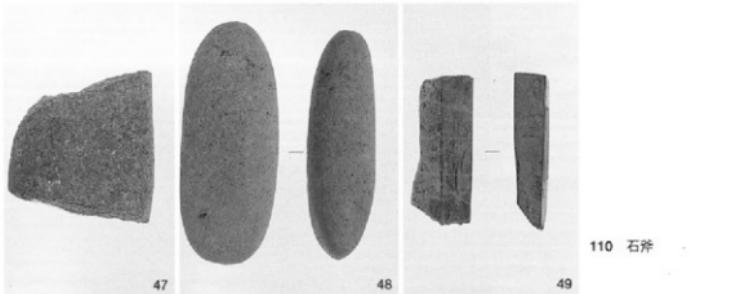
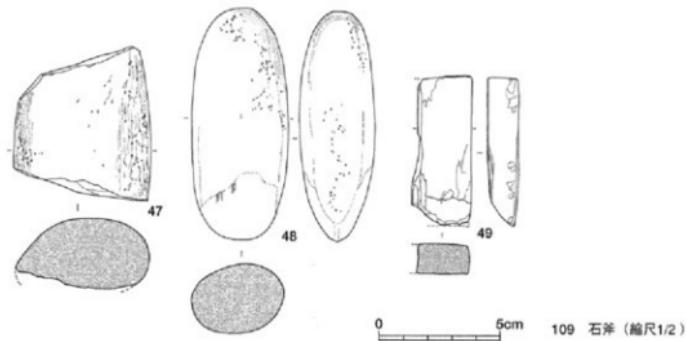
47~49の包含層出土の3点である。47は硬砂岩製の大型蛤刃石斧の欠損品で、体部中位で上下及び片面を破損する。表面に研磨痕が残る。器面は暗灰色を呈す。48は完形の蛤刃石斧で、玄武岩の長楕円形の自然縫を一部加工して石斧としている。上端部を敲打して狭い平坦面をつくり出し、刃部は研磨して蛤状の刃をつくる。器面は灰色を呈す。49は硬質頁岩製の偏平片刃石斧である。上端部及び片側を欠損するが、全体を丁寧に研磨し、器面は滑らかで光沢があり、乳灰色を呈す。刃部は筋理面と直交して研ぎ出している。



107 石鍤VIIc類 未製品 (縮尺1/2)

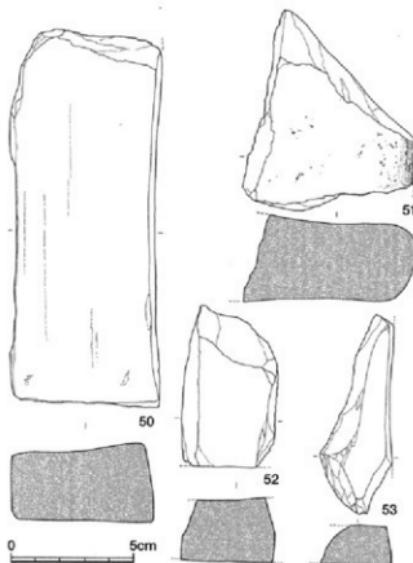


108 石鍤未製品



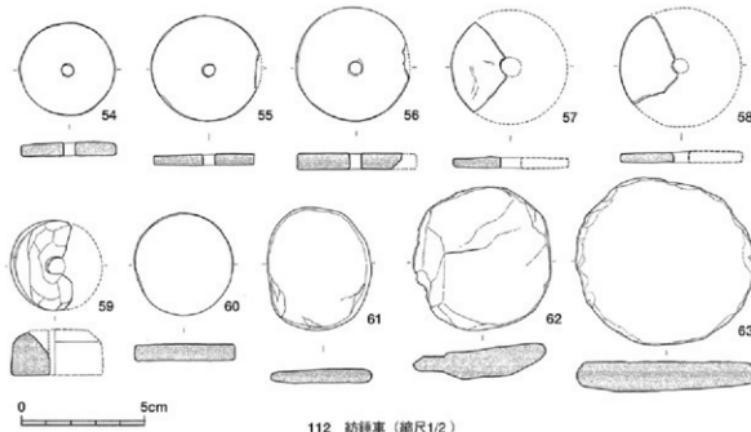
砾石 (50~53)

包含層から50~53の4点が出土した。50は砂岩製で、端部を少し欠損するがほぼ完形である。形状は綫長の直方体を呈し、使用面は表裏2面と側面1面の3面である。表裏2面は縦方向の研ぎ痕跡があり、側面は中央部が研ぎ減りしている。表裏の2面は滑石などの研磨用、側面は刃研ぎ用に使用されたと思われる。器面は茶灰色を呈す。51・52は砂岩製の砾石の一部である。51は表裏2面の使用痕があり、研ぎ減りが著しい。52は3面の使用痕が残る。51が濃灰色、52は茶灰色を呈す。53は凝灰岩製砾石の細片で、3面に使用痕が残る。器面は暗紫灰色を呈す。

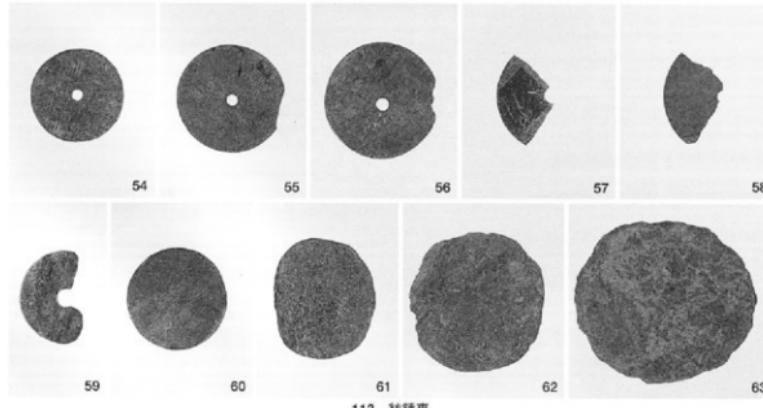


紡錘車 (54~63)

包含層から54~63の10点が出土した。54~59が完成品で、60~63が未製品である。54は滑石製で完形である。全体を丁寧に研磨し表裏とも平滑に仕上げる。孔は片面穿孔で、器面は緑灰色を呈す。55も滑石製で縁の一部をわずかに欠くがほぼ完形である。54に比べて径・厚さともに大である。器面は乳灰色を呈す。56は滑石製の薄手のもので、器面は暗緑灰色を呈す。57と58は滑石製で、全体の4分の1程の欠損品である。59は全体の3分の1程の欠損品で、断面が台形状を呈するタイプのものである。滑石製で器面は乳灰色を呈す。60は全体を丁寧に研磨して円盤としているが、穿孔がなされていない工程の未製品である。滑石製で乳灰色を呈す。61~63は緑泥片岩を用いた未製品で、整形の初期段階のものである。61が縁部に一部研磨が施されたもので、62と63は縁部の敲打だけの整形段階の未製品である。



112 紡錘車 (尺度1/2)



113 紡錘車

刀器 (64~66)

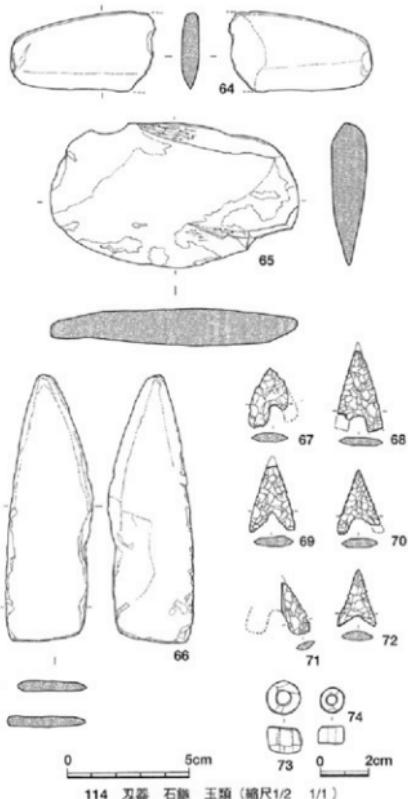
竪穴住居跡の床面から出土した4、包含層から出土した64~66の計4点である。64は玄武岩製で、石鎌形を呈する切っ先の破片である。背部は緩やかにカーブし、刃部は直線的で両刃である。芽刈鎌として用いられたと考えられる。66は粘板岩製の剣形の欠損品であるが、基部の形状から完形に近いと思われる。先端からそれぞれ3cmと4cmの位置までも両刃の刃部を研ぎ出し、それより下位は敲打の跡が残る。きわめて薄手で、切り出しナイフと類似する。65は凝灰岩製で、器面は小豆色を呈す。形状は石包丁に似るが穿孔は無い。外湾する刃部は両刃で磨耗が著しい。背部の厚さは1.2cmと厚く、表裏両面と両端部は丁寧に研磨されている。

石錐 (67~72)

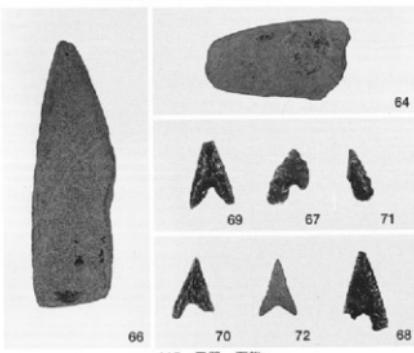
竪穴住居跡床面から出土した2~3、包含層から出土した67~72の計8点である。包含層出土の67~71が黒曜石製、72がサヌカイト製である。67はハート形を呈し、一方の脚部を欠損する。二次加工は大まかで、大剥離面及び主要剥離面の一部を残す。68は長二等辺三角形を呈し、先端と両脚部を欠損する。抉り入りが深くU字型を呈し、細かな全面への二次加工により丁寧に仕上げられている。両側面は細かな押圧剥離により、鋸状を呈す。69も長二等辺三角形を呈し、先端と一方の脚の先端を欠損する。抉り入りが深く、細かな全面への二次加工により丁寧に仕上げられている。70は一方の脚部先端を欠損し、二次加工は68、69と同様に細かく丁寧である。71は脚部の破片である。72は完形で、長二等辺三角形の抉り入り部は浅く八字型を呈す。全面への二次加工はやや粗である。

玉類 (73、74)

包含層から73・74の2点が出土した。いずれも臼形をした滑石製の小玉で、73がやや大きく、乳白色を呈す。



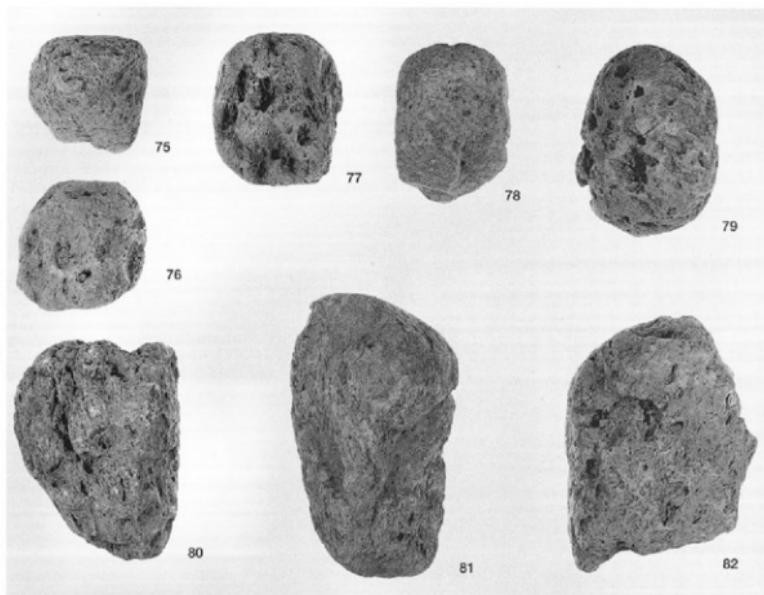
114 刀器 石錐 玉類 (縮尺1/2 1/1)



115 刀器 石錐

軽石 (75~82)

包含層から9点の軽石が出土した。長径5cm・短径3cmのものから15cm・10cmのものを含み、重量は最も小さいものが9g、最も大きいものが109gである。近くに火山がないことから、海岸に漂着したものを採集した可能性もある。浮子(アバ)として使用されたことが考えられる。



116 軽石

石製品計測表

頁	Fig.	No.	グリッド	層	種類	分類	法量 (mm)			重量(g)	石材	取上No.	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
26	52	1	H-7	床面	石剣		4.64	2.56	8.60	10.76		S-86	00201
		2	F-5	床面	刃器		5.65	4.34	6.65	23.44	粘板岩	S-84	00202
		3	—	床面	石鎌		1.58	1.47	0.25	0.52	黒曜石		00203
		4	B-8	床面	石鎌		2.92	1.66	0.40	1.24	サガシ		00204
		5	—	床面	石錘	未製	3.70	2.11	2.13	33.52	滑石	S-87	00205
		6	J-4	床面	石錘	I a	5.78	2.65	2.64	53.41	滑石	S-57	00206
		7	H-7	床面	石錘	I a	7.88	3.42	3.60	103.78	滑石	S-17	00207
		8	—	床面	石錘	VII a	10.88	9.57	8.87	1,036.28	滑石		00208
54	89	9	III区	II上	石錘	I b	5.62	3.41	2.78	151.03	滑石	S-31	00209

頁	Fig.	No.	グリッド	層	種類	分類	法量 (mm)			重量(g)	石材	取上No.	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
		10	D-9	II 上	石鍤	I b	5.86	3.29	3.11	119.35	滑石	S-58	00210
		11	E-15		石鍤	I c	12.22	4.41	3.93	246.29	滑石	S-14	00211
		12	1 ハ		石鍤	I c	14.13	4.05	3.69	253.86	滑石	S-4	00212
		13	F-7	I	石鍤	I c	5.62	3.13	2.08	52.89	滑石	S-16	00213
		14	L-8	I 下	石鍤	II	5.86	5.38	4.28	221.43	滑石	S-35	00214
55	91	15	1 ハ		石鍤	III a	12.22	4.97	5.02	364.65	滑石	S-3	00215
		16	J-9	II	石鍤	III b	14.13	4.89	4.88	438.57	滑石	S-37	00216
55	93	17	IV 区	I	石鍤	IV a	3.21	2.04	1.92	15.45	砂岩	S-25	00217
		18	J-7		石鍤	IV a	3.19	1.82	1.57	11.56	滑石	S-39	00218
		19	I 区	I	石鍤	IV a	4.11	1.48	1.48	10.74	砂岩	S-15	00219
		20	F-7	I	石鍤	IV b	3.16	1.29	0.93	5.98	滑石		00220
		21	1 ハ		石鍤	IV b	2.64	0.97	0.75	2.78	硬質砂岩	S-5	00221
56	95	22	K-7	II	石鍤	V	11.52	5.99	2.82	274.89	滑石	S-38	00222
		23	D-11	II 下	石鍤	V	7.82	4.75	2.46	139.30	滑石	S-76	00223
		24	2 ハ		石鍤	V	8.53	8.04	2.44	238.19	滑石	S-32	00224
57	97	25	H-5	I 下	石鍤	VI a	7.17	7.17	2.47	210.60	玄武岩	S-47	00225
		26	1 ハ		石鍤	VI a	6.61	6.19	2.21	157.93	玄武岩	S-2	00226
		27	D-11	II 下	石鍤	VI a	7.96	6.40	2.72	269.63	硬質砂岩	S-75	00227
		28	G-11		石鍤	VI a	7.45	6.17	1.68	117.94	粘板岩	S-46	00228
		29	E-9	II 中	石鍤	VI a	9.43	6.64	1.39	146.53	粘板岩	S-63	00229
		30	—		石鍤	VI a	8.39	5.24	1.04	75.50	粘板岩		00230
		31	J-10	II 上	石鍤	VI a	8.67	6.27	2.00	168.28	玄武岩	S-41	00231
		32	—		石鍤	VI a	9.25	5.74	2.53	216.42	玄武岩		00232
58	99	33	K-12	II 上	石鍤	VI a	7.03	4.58	3.17	137.50	凝灰岩	S-66	00233
		34	J-7	II 上	石鍤	VI b	8.79	8.00	2.77	307.85	玄武岩	S-40	00234
		35	IV 区	I	石鍤	VI b	8.24	7.18	2.12	211.38	玄武岩	S-24	00235
		36	IV 区	I	石鍤	VI b	9.99	7.99	2.72	287.08	滑石	S-28	00236
		37	I 区	I	石鍤	VI b	7.55	6.04	1.24	85.15	花崗岩		00237
		38	L-8	I 下	石鍤	VI b	10.25	7.41	4.46	480.90	花崗岩	S-34	00238
59	101	39	F-6	II 下	石鍤	VI a	12.05	11.68	8.23	1,227.65	滑石	S-83	00239
60	103	40	G-12	I 下	石鍤	VI b	6.21	12.17	10.47	1,205.55	滑石	S-49	00242
		41	F-2	I 下	石鍤	VI b	6.19	12.14	11.76	1,335.60	滑石	S-52	00243
61	105	42	—		石鍤	VI b	16.20	15.36	6.20	2,623.70	滑石		00241
		43	H-11	II 上	石鍤	VI b	16.60	15.24	8.44	3,505.00	滑石	S-54	00240
62	107	44	K-7	II 中	石鍤	VI c	6.64	6.02	1.54	98.72	滑石	S-43	00244
		45	—	II 上	石鍤	未製	9.99	5.24	4.07	390.06	滑石	S-95	00245
		46	F-6	I 下	石鍤	未製	8.14	4.18	1.11	51.95	滑石	S-127	00246

頁	Fig.	No	グリッド	層	種類	分類	法量 (mm)			重量(g)	石 材	取上No	登録No
							長さ	幅	厚さ				
63	109	47	—	—	石斧		5.91	5.78	3.80	166.88	硬質砂岩	S-122	00247
		48	F-2	I 下	石斧		9.75	3.94	2.93	187.52	玄武岩		00248
		49	J-8	I	石斧		5.97	2.46	1.22	37.92	粘板岩	S-20	00249
63	111	50	I ハ	砥石		15.41	5.97	3.16	597.98	砂岩	S-7	00250	
		51	III 区	砥石		8.61	7.75	3.14	289.22	砂岩	S-31	00251	
		52	G-4	II 下	砥石	6.15	3.93	2.57	109.60	砂岩	S-72	00252	
		53	IV 区	砥石			8.41	2.91	1.56	38.52	粘板岩	S-91	00253
64	112	54	IV 区	I	紡錘		3.83	3.88	0.58	15.92	滑石	S-27	00254
		55	I ハ	紡錘	4.47	4.49	0.45	17.06	滑石	S-6	00255		
		56	K-11	I	紡錘	4.80	4.74	6.70	30.28	滑石	S-23	00256	
		57	IV 区	紡錘			3.73	2.27	0.48	5.74	滑石	S-26	00257
		58	J-10	I 下	紡錘		3.69	2.43	0.43	6.84	滑石	S-36	00258
		59	D-14	I 下	紡錘		3.70	2.51	1.61	19.28	滑石	S-60	00259
		60	I ハ	紡?	木製		4.16	4.19	4.16	24.13	滑石	S-129	00260
		61	F-7	II 下	紡?	未製	5.11	4.28	0.66	24.98	滑石	S-82	00261
		62	H-6	I 下	紡?	未製	5.79	5.51	1.30	55.31	滑石	S-2	00262
		63	IV 区	I	紡?	未製	6.93	7.52	1.23	110.83	滑石	S-29	00263
65	114	64	II 区	II 上	刃器		3.34	6.05	0.72	19.95	玄武岩		00264
		65	K-7	II 上	刃器		10.35	5.93	1.47	116.65	凝灰岩		00265
		66	I ハ	刃器			10.97	3.30	0.44	29.99	粘板岩		00266
		67	F-5	II 满	石鎚		2.42	1.68	0.36	1.25	黑曜石		00267
		68	C-12	石鎚			3.27	1.81	0.33	1.66	黑曜石		00268
		69	F-5	II 满	石鎚		2.73	1.79	0.40	1.64	黑曜石		00269
		70	E-2	石鎚			2.54	1.69	0.36	1.10	黑曜石		00270
		71	F-5	II 满	石鎚		2.18	0.87	0.29	0.63	黑曜石		00271
		72	E-2	石鎚			2.33	1.52	0.33	0.94	黑曜石		00272
		73	I 区	満	玉		0.48	0.74	0.71	0.38	滑石		00273
		74	I ハ	玉			0.36	0.52	0.53	0.15	滑石		00274
66	116	75	K-8	浮子			5.04	5.01	3.46	28.12	軽石		00275
		76	II 区	II 上	浮子		5.68	5.46	3.02	25.19	軽石		00276
		77	III 区	II 上	浮子		8.89	7.34	5.05	103.62	軽石		00277
		78	J-9	II	浮子		6.26	5.53	3.70	34.28	軽石		00278
		79	—	浮子			11.98	6.89	5.18	109.49	軽石		00279
		80	I 区	II 上	浮子		6.37	4.73	4.60	53.67	軽石		00280
		81	J-9	II	浮子		7.65	5.64	5.61	61.83	軽石		00281
		82	—	浮子			10.66	7.77	5.23	98.11	軽石		00282
		83	F-11	II 下	浮子		4.45	3.03	2.56	8.98	軽石		00283

第4章 おわりに

報告を終えるに当たり、小体遺跡の発掘調査の成果と課題を整理してまとめたい。

遺構について

今回の調査で検出した遺構は、大型の円形竪穴住居跡1棟だけである。この住居が建てられた時期は、先に報告したように床面から出土した土器の形式から弥生時代中期後半と考えられる。この時期の糸島平野や早良平野、さらには福岡平野に見られる円形竪穴住居跡は、櫛井川流域の宝台遺跡や早良平野の入部遺跡のように、竪穴の径が概ね5~6mの規模で、5~7棟を最小単位として建てられていることが一般的である。本遺跡では1棟だけであり、周囲に同時期の住居跡は検出されなかった。竪穴の径が10mを超える大型住居跡は、福岡平野の比恵遺跡群からも検出されているが、大規模な集落に混在し単独に存在するものではない。

このように、本遺跡の大型円形竪穴住居は集落と離れた場所に単独に建てられたもので、日常の居住用としては建てられていないと考えられる。その用途や性格については断定しがたいけれども、床面の遺物出土状況から、石釜などの石器類や漁網などを共同で製作する作業場であり、何らかの祭祀も行われていたことが考えられる。その後間もなく使われなくなり、中期後半のある時期に廃絶されて廃地の状態で残されたと思われる。その後弥生時代後期前半になって土器や石器が大量に投棄されることが始まり、後半まで継続する。この理由については不明であるが、器物の投棄は意識的に住居跡に集中している状況から、この時期には何らかの祭祀場となっていたことが考えられよう。

遺物について

出土した遺物は弥生土器、石器類、玉類のほかに、獸骨や魚骨などの自然遺物があるが、自然遺物については報告できなかった。弥生土器は器種が極めて多く、中崩後半のものは日常用のほか祭祀用のものも含む。後期のものは大部分が日常用であるが、酒器と考えられる注口土器や杯もあり、「魏志」倭人伝に記す「人々は生米酒を好む」の様子を彷彿とさせる。弥生土器で本遺跡を特徴づけるものに絵画文土器と外来系土器がある。尾大なる量の土器のうち動物を描く絵画文土器はわずかに1点だけであり、福岡市における最初の発見例である。種類は確定しがたいけれども、底部のX印とともに興味深い。外来系土器には瀬戸内系と山陰系のものがある。胎土分析を行っていないので廃地の同定はできないが、弥生時代後期には、後の出雲や吉備地方との海を介した広域的な交流があったことが窺われる。

石器類の中でも本遺跡を特徴づけるものは、刃器、軽石、紡錘車、石鍤である。刃器の形態は石包丁や鎌、劍などに似ているが、付近に水田となる可耕地が見られないことから、穀穀具などに使用されたものではなく、例えば魚を捌く刃器や海草刈り用として使用されたと思われる。軽石は近代まで木製の浮子とともに用いられており、弥生時代も同様であったと考えられ、木製のものは残らなかったのであろう。紡錘車は未製品を含め10点が出土した。この出土数は他の遺跡に比べて決して少なくなく、本遺跡でも石鍤に純く高い割合を占めている。本遺跡の紡錘車は、農耕集落遺跡のそれとは違い、漁網や延繩の紡績に使用されたことが考えられよう。石鍤には漁網鍤と釣池の沈子があり、大部分が滑石と玄武岩が用いられている。滑石は琵琶門山に原産地があり、玄武岩はすぐ近くの呑山や浜海に見られるので、それらを利用したものであろう。

本遺跡からは未製品を含めて41点の石鍤が出土したが、今宿平野東南部にある本遺跡とほぼ同時期の今宿五郎江遺跡からも46点の石鍤が出土している。今宿五郎江遺跡からは石鍤のほかに石斧や石包丁、農耕具を含む各種の木製品が出土しており、後背地に可耕地をもつ集落遺跡である。本遺跡とは石鍤の組成に若干の相違が見られ、今宿五郎江遺跡では石材がすべて滑石であること、自然凹縫を用いた打欠き鍤が見られないこと、分銅型のI類の占める割合が高いこと、ドーナツ型のⅢ類（今宿五郎江遺跡報告書分類ではⅠ類）の中に中央孔

のほかに側面から下端部にもう1孔を穿つものがあることなどの違いがある。石鐘に見られるこれらの相違は、本遺跡周辺では釣漁とともに外洋性の網漁も行われ、今宿五郎江遺跡では釣漁の比重が高かったと思われる。両遺跡とも漁網錐の形態は多様であるが、当時いかなる種類の網漁が行われていたかについては今後の課題である。なお、分銅型を呈する滑石製沈子については、すでに下條信行氏によって形式分類がなされている。それによれば、博多湾型と糸島型に分類でき、前者は博多湾から北に分布する様相を示し、後者は前原灘から西に分布する様相を示すという。また、今津潟周辺は両分布の重なる地域で、本遺跡も同様である。

結び

最後に、北部九州弥生社会の発展過程における小塚遺跡の歴史的背景に言及して結びとしたい。

小塚遺跡が形成される弥生時代中期後半は、糸島平野の三雲南小路遺跡、早良平野の橋渡遺跡、樋井川流域の丸尾台遺跡、福岡平野の須佐岡本遺跡などに見られるように、前漢鏡や鉄製武器などを副葬する墓が出現する時期にあたる。『漢書』地理志に、「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国と爲る、歲時を以て來たり獻兄すと云う」とあり、紀元前108年の楽浪郡設置を契機に、北部九州の倭人たちが定期的な朝貢を行っていたことが窺われる。この反映が墓に副葬される前漢代の器物であるが、波荒い玄界灘を渡海する能力を備えた集団の存在が前提となろう。糸島平野は『魏志』倭人伝に「世々土有り」と記された「伊都國」の地であり、三雲南小路遺跡の墓はその最初の王墓であることは確實であろう。したがって、その王の命を受けて海を渡った集団が居たはずで、どこに所在したかが問題である。つまり「伊都國」の外港がどこかということであるが、これまでの調査から、糸島半島西南基部にあって引津湾に面し、貨泉などが出土した御床松原遺跡と新町遺跡が有力である。しかしながら、糸島半島東南基部の博多湾に開けた大原の地に、弥生時代中期後半に出現して短期間のうちに廃絶する小塚遺跡も、「伊都國」の対樂浪郡外交の展開とは無縁でなく、一時期の外港として機能したことこそ十分に考えられるのではなかろうか。

小塚遺跡が再び登場するのは弥生時代後期前半で、後半まで継続する。この時期は日本列島のクニグニの統合が進み、「後漢書」倭伝に記す「倭國大乱」を含む時期である。糸島平野においては、井原遺跡から有田平原遺跡へと後漢鏡を多量に副葬する王墓が継続する。これは北部九州の各平野には見られない現象で、「伊都國」が引き続き後漢帝国との外交にその実力を發揮したことが考えられる。小塚遺跡はまさにその時期に再び登場するのだが、多量の土器などの授業が継続して行われている特異な現象は、後に「一大半」が置かれる「伊都國」を中心軸として展開された弥生時代後期社会の激動性を象徴するものではなかろうか。

弥生時代は稻作の開始と共に始まり、弥生社会は稻作農耕をその経済基盤として発展したことは常に説かれるところである。しかしながらその一方で縄文時代以来の漁撈活動も行われ、海浜に居住した集団もいたのである。これらの集団は漁撈活動だけでなく、大陸との対外交渉の実際的な扭い手でもあったと考えられる。平野部に集落を造って農耕を営み権力構造を生み出す集団と、海浜部に居住して漁撈活動を営みながら対外交渉を担う集団との関係がどのような形で成立し、どのように展開したかについては今後の課題である。この意味から、小塚遺跡の調査成果はその解明に一步近づく資料を提供したと言えるのではなかろうか。

参考・引用文献

- ・高倉洋彰編『宝台遺跡』(日本住宅公團) 1970年
- ・中原志・石井忠・下条信行『丸尾台遺跡報告』(『宝台遺跡』所収)
- ・濱石哲也編『入部V』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集)
福岡市教育委員会 1995年
- ・下村智編『比恵遺跡群(20)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集)
福岡市教育委員会 1996年
- ・力武卓治・横山邦継編『古武遺跡群 鮎盛・古武圓場整備事業関係調査報告書2』
(福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集) 福岡市教育委員会 1996年
- ・二宮忠司編『福岡市今宿五郎江遺跡II』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集)
福岡市教育委員会 1996年
- ・下條信行「弥生・古墳時代の九州型石鏡について」
(九州文化史研究所紀要第29号) 1984年
- ・塙屋勝利編『早良王墓とその時代—墳墓が語る激動の弥生社会—』
(福岡市立歴史資料館図録第11集) 1986年
- ・後藤直「青柳種信の考古資料(一) —三雲南小路と井原道溝に関する資料—」
(福岡市立歴史資料館研究報告第五集) 1981年
- ・柳田康雄編『三雲遺跡—南小路地区編—』(福岡県文化財調査報告書第69集)
福岡県教育委員会 1985年
- ・原田大六『平原弥生古墳』1991年
- ・片上裕弘編『御床松原遺跡』(志摩町文化財調査報告書第3集)
志摩町教育委員会 1983年
- ・橋口達也編『新町遺跡』(志摩町文化財調査報告書第7集)
志摩町教育委員会 1987年
- ・橋口達也編『新町遺跡II』(志摩町文化財調査報告書第8集)
志摩町教育委員会 1988年
- ・小池史哲編『新町遺跡III』(志摩町文化財調査報告書第10集)
志摩町教育委員会 1990年
- ・小体遺跡発掘調査会「動物絵画のある壺形土器について」
考古学雑誌第66巻第1号 1980年
- ・常松幹雄「北部九州におけるいわゆる山陰系土器」
九州考古学 第60号
- ・常松幹雄「伊都國の土器、奴國の土器」
古代探査Ⅲ 1991年
- ・常松幹雄「弥生時代の甕棺に描かれた絵画と記号」
福岡市博物館研究紀要第7号 1997年
- ・正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』
木耳社 1992年
- ・大阪府立弥生文化博物館【卑劣時の動物ランド—よみがえった弥生犬—】
平成8年度春季特別展図録 1996年

あとがき

小萍遺跡を発掘調査した昭和52年は、かつてない程の厳しい寒波に見舞われた年でした。発掘作業は困難を極めましたが、日を追って作業員の顔が痩いてきました。ものすごい量の遺物が積み重なっていたからです。土器の量だけではありません。石錘や外来系土器など貴重な遺物が続々と出土し、毎日が感動と疑問の連続でした。なぜこれだけ大量の遺物を捨てたのだろう？

いや、わざと割ったみたいだ。

どんな意味があったのだろう？

もしかしたら、大漁の願いや祝いをした場所かもしれない。

それにしては遺物の量が多いから、なにか事件に巻き込まれたのでは？

発掘しながら永遠に解けそうもない謎に、作業員と会話を弾みました。

しかも最後になって豎穴住居跡が姿を現したのですから、私たちの興奮は頂点に達しました。

直径約11mという並外れに大きな豎穴住居の上に遺物を堆積させた弥生人の行為は、一体どんな理由があったのでしょうか。

発掘終了後、こんな疑問に応えたいと整理作業を始めましたが、20年という時間だけが容赦無く過ぎ去りました。職場の異動などいろいろな事情があったにせよ、この20年間、何一つ明らかにできなかったわけですから、私たち二人の怠慢と断定せざるをえません。

ようやく発行できたという安堵感よりも、20年間も公表できなかったことを大いに恥じています。

1997年3月 塙屋、力武



発掘終了後のようす（昭和52年4月）



出土遺物の整理作業（昭和52年夏）

小蘿遺跡

一大原B遺跡第1次調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集
平成9年（1997）3月1日

発行 今津大原小体遺跡調査会
福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1 〒(092) 711-4667
印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15 〒(092) 451-0027

